



2013 Japan Sports Association Club Manager Training Project

平成25年度 公益財団法人日本体育協会 クラブマネジメント指導者海外研修事業 報告書



平成25年度 公益財団法人日本体育協会 クラブマネジメント指導者海外研修事業 報告書

○もくじ

団長総括「ドイツでの研修を終えて」	2
派遣団名簿	4
派遣日程表	6
派遣先マップ	8
I 講義概要	9
II クラブ視察	37
III 団員レポート	45
IV 派遣事務報告	79
実施要項	84
フォトスナップ	85

ドイツでの研修を終えて

日本派遣団 団長 桑田 健秀

SC 全国ネットワーク（総合型地域スポーツクラブ全国協議会） 幹事長
NPO 法人地域総合スポーツ倶楽部ピボットフット 理事長

まず、ドイツ滞在期間中は不安と期待で過ごした1週間であったが、団員1人ひとりの努力と協力により全員が大きな事故もなく、また団員がそれぞれの日常生活では体験しがたい経験と知識という大きな土産を持って無事に帰国できたことを報告する。さらに、派遣団全員が大変充実した研修期間を送れたことも付記する。

1. ドイツで研修する意義

今回、私が日本派遣団長として団員に対して提示したテーマは、『『本場のスポーツクラブの雰囲気』を体感することを通じて、各自が自身の総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）で抱える問題・課題の解決に少しでも役立つ」ということであった。その成果については、研修期間を通じて団員の1人ひとりが少なからず得たものがあつたと確信している。そして、今回の研修で体感した内容を自身の所属クラブはもとより、近隣の総合型クラブにも波及させ周辺の総合型クラブの見本となるようなクラブ運営を各々のクラブで目指してくれることを期待したい。

2. ドイツで感じたこと

私が今回の研修で感動したことは、ドイツのクラブが使用している運動施設やクラブハウス等のハード面が充実していることだけではなく、クラブスタッフが使命感に燃えて活動し、クラブを支える素晴らしい原動力となっていること、そしてクラブが地域社会に深く根付き市民生活にとってなくてはならないコミュニティの核として存在していることであった。

しかし、100年以上の歴史を持つドイツのクラブにおいても、現代社会が抱える問題・課題に対応するべく苦勞しているように感じた。少子高齢

化に伴う運営スタッフやボランティア、クラブ会員、参加者の減少、行政からの補助金等の減少によってクラブの財源確保、人材確保の面で日本と同様に大きな問題・課題を抱えていた。むしろ、ドイツの場合、日本よりも長い歴史があるがゆえに、大きな方向転換や構造改革が難しいのではないかという印象さえ持った。ただし、そのような状況の中でもクラブ関係者が常に新しい挑戦を行っており、クラブを存続させ、次世代へ繋いでいこうとする思いを感じることができた。

3. 日本の総合型クラブがドイツのスポーツクラブから学ぶべきこと

日本の総合型クラブは、ドイツのスポーツクラブと比べまだ歴史も浅く経験も少ない中で、ドイツのスポーツクラブと同じように社会環境の変化への対応方法を迫られている状況にあると言える。そのような状況の中で、日本の総合型クラブがドイツのスポーツクラブから学ぶべき点は次のようなことである。

(1) 財源確保から人材育成へ

各々の総合型クラブが自身の方向性を見定め、自分たちの持つ各種資源を活用しながら財源を確保すること、そしてその財源を活かして人材を育成し、質の高い指導者とクラブ運営者を確保することが今後の総合型クラブ発展の鍵であると改めて痛感した。

(2) 地域コミュニティの核となること

日本の総合型クラブに求められることは、自分たちの置かれた立場・環境をよく分析し、自らのクラブの指針を定め、スポーツを軸とした地域コミュニティの核として地域住民に受け入れられることである。そして、ドイツのスポーツクラブのように地域社会の一員としての「市民権」を獲得



するために地道な活動が展開されることが必要である。

(3) ロビー活動

日本人が最も苦手とする地元の政治家や経済界、行政への適切なロビー活動も今後必要になってくる。日本の総合型クラブはまだ補助金・助成金に頼る傾向が強い。ドイツのスポーツクラブでは、例えば民間企業へ働きかけて財源を確保したり、行政や政治家へ働きかけ適切な支援を受けるといった取り組みが積極的に行われており、日本の総合型クラブはそういったロビー活動の努力が不足しているように感じた。

4. 日本のスポーツ界と総合型クラブ

今、日本のスポーツ界は大きく変わろうとしている。2011年に施行されたスポーツ基本法、2012年に公表されたスポーツ基本計画、そして2013年には2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催決定という大きな変化のあった日本スポーツ界において、我々地域で活動する総合型クラブもさらなるステップアップが求められることであろう。

総合型クラブのステップアップを目指す上での大きなテーマは、やはり個々の総合型クラブの「自立・自律」と「財源確保」であると考えている。それぞれの総合型クラブが独自に獲得した財源で質の高い運営者や指導者を確保し、国民1人ひとりのライフステージにあった良質なプログラムを提供することを通じて、元気なまちづくりや国づくりに貢献できるようになるべきではないのかと考えている。

また、現在活動している約3,400クラブが共に切磋琢磨し、連携・協働するためにもクラブ間ネットワークの強化が必要であり、SC全国ネットワー

ク（総合型地域スポーツクラブ全国協議会）のような総合型クラブの全国組織のスケールメリットを生かしながら、社会に総合型クラブをアピールする必要性が今後求められると考えられる。

私自身、今回のドイツ研修で学んだことを活かしながら総合型クラブの理事長として、SC全国ネットワークの幹事長として今後の活動を推進したいと新たに決意するところである。

5. 最後に

最後に、今年度（平成25年度）で5回目となる本事業に関して、受け入れ先であるライン・ノイス郡関係者をはじめ独立行政法人日本スポーツ振興センター及び公益財団法人日本体育協会の関係者に対して感謝を申し上げたい。

今回の研修では過去年度では実施されなかったグループディスカッションを研修プログラムに取り入れていただいた。講義やクラブ視察を通じてインプットした内容を日本人同士で話し合いアウトプットすることで、より日本の総合型クラブとドイツのスポーツクラブが持つ相違点やドイツのスポーツクラブの取り組み内容で日本の総合型クラブにおいて応用できる点等について考えをまとめることができた。また、派遣団がアウトプットした情報に対して、講師陣がドイツ側の視点で様々な指摘やアイデアを提出することで、日本人だけでは気付かない新たな視点や考え方を得ることができた。このように、本事業全体をスムーズに進行させるため、過去年度に培ったノウハウ等を駆使し、新しい研修プログラムやスケジュール設定等きめ細やかな配慮をいただいたことに深く感謝申し上げたい。

平成 25 年度

公益財団法人日本体育協会クラブマネジメント 指導者海外研修事業 派遣団名簿



団 長

くわ た きよひで
桑田 健秀

所属：SC 全国ネットワーク /
NPO 法人地域総合スポーツ倶楽部
ピボットフット
役職：幹事長 / 理事長
クラブ所在地：東京都大田区
資格：公認クラブマネジャー



団 員

さ く ま ひではる
佐久間 秀晴

所属：NPO 法人
尾花沢総合スポーツクラブ
役職：クラブマネジャー
クラブ所在地：山形県尾花沢市
資格：公認アシスタントマネジャー



総 務

やす い ひろ き
安井 大樹

所属：公益財団法人日本体育協会
役職：クラブ育成課 主事



団 員

い と う とし き
伊藤 智毅

所属：特定非営利活動法人
塙山コミュニティクラブ
役職：専務理事
クラブ所在地：茨城県日立市
資格：公認クラブマネジャー



団 員

いそ だ だいじ
磯田 大治

所属：NPO 法人おにスポ
役職：理事長
クラブ所在地：北海道登別市
資格：公認クラブマネジャー



団 員

ひるぬま たか お
蛭沼 隆雄

所属：特定非営利活動法人
あいおいスポーツクラブ
役職：専務理事
クラブ所在地：群馬県桐生市
資格：公認アシスタントマネジャー



団 員

いわぶち ゆみ こ
岩渕 裕美子

所属：NPO 法人前沢いきいきスポーツ
クラブ
役職：事務局長
クラブ所在地：岩手県奥州市
資格：公認アシスタントマネジャー



団 員

いり え よし こ
入江 能子

所属：クラブ123荻窪
役職：クラブマネジャー
クラブ所在地：東京都杉並区
資格：公認クラブマネジャー



団員
の だ
野田 ひろみ

所属：城下町スポーツクラブ
役職：クラブマネジャー
クラブ所在地：神奈川県小田原市
資格：公認クラブマネジャー



団員
きしだ まさあき
岸田 昌章

所属：げんき倶楽部はしもと
役職：会長
クラブ所在地：和歌山県橋本市
資格：公認アシスタントマネジャー



団員
ふじまき としこ
藤牧 敏子

所属：NPO 法人
長野スポーツコミュニティクラブ
東北
役職：事務局主任
クラブ所在地：長野県長野市
資格：公認アシスタントマネジャー



団員
ひさもと なるみ
久本 成美

所属：NPO 法人
しいだコミュニティ倶楽部
役職：理事長
クラブ所在地：福岡県築上郡築上町
資格：公認アシスタントマネジャー



団員
ほんだ こういち
本田 高一

所属：アプロス菊川
役職：運営委員長
クラブ所在地：静岡県菊川市
資格：公認アシスタントマネジャー



団員
さいとう ようこ
齋藤 陽子

所属：NPO 法人クラブおおづ
役職：クラブマネジャー
クラブ所在地：熊本県菊池郡大津町
資格：公認クラブマネジャー



団員
ふるた せいいち
古田 政一

所属：NPO 法人
ウィル大口スポーツクラブ
役職：事務局長
クラブ所在地：愛知県丹羽郡大口町
資格：公認クラブマネジャー

事業協力者

多田 茂 (通訳)

松尾 喜文 (通訳)

平成 25 年度

公益財団法人日本体育協会クラブマネジメント 指導者海外研修事業 日程表

日付	場所	時間	プログラム内容
10月26日 (土)	成田	17:00 ~ 18:30	最終打合せ・結団式 於：成田ビューホテル
		19:00	夕食
10月27日 (日)	成田	9:00	成田空港へ移動
		9:20	成田空港着
		12:00	フィンランド航空 074 便にて ヘルシンキ・ヴァンター国際空港へ
	ヘルシンキ	15:20	ヘルシンキ・ヴァンター国際空港着
		16:30	フィンランド航空 2707 便にて デュッセルドルフ国際空港へ
	デュッセルドルフ	17:55	デュッセルドルフ国際空港着
		18:00	グレーヴェンブロイヒへ移動
	グレーヴェンブロイヒ	18:50	ホテルゾンダーフェルト着
		20:00	夕食
10月28日 (月)	グレーヴェンブロイヒ	9:00 ~ 9:30	【表敬訪問】 ライン・ノイス郡庁舎 ○ライン・ノイス郡 副郡長 ユルゲン・シュタインメッツ氏 ○在デュッセルドルフ日本総領事館 首席領事 相馬安行氏 ○ライン・ノイス郡スポーツ連盟 理事長 トーマス・ラング氏
		9:30 ~ 12:30	【講義①】 「社会の発展とスポーツ」 ーポスト工業化社会でのスポーツとスポーツクラブの役割ー 講師：ケルン体育大学 特任教授 フォルカー・リットナー氏
		12:30 ~ 13:30	昼食
		13:30 ~ 16:00	【講義②】 「ライン・ノイス郡のスポーツ」 ードイツのスポーツシステムー ーライン・ノイス郡のスポーツとその発展ー 講師：ライン・ノイス郡スポーツ相談課 アクセル・ベッカー氏
		18:00	【クラブ視察①】 「TUS グレーヴェンブロイヒ」 ーサッカー部門訪問ー ーユース育成コンセプトー 夕食懇親会
10月29日 (火)	グレーヴェンブロイヒ	9:00 ~ 12:00	【講義③】 「FIT for JOB- 企業に対するクラブのオファー」 講師：TSV バイヤードルマーゲン アクセル・ヴェルツ氏
		12:00 ~ 13:00	昼食
		13:15 ~ 13:45	コルシェンブロイヒへバスで移動
	コルシェンブロイヒ	13:45 ~ 15:15	【講義④】 「市町村のスポーツ振興」 講師：コルシェンブロイヒ市スポーツ課長 ハンス・ペーター・バルター氏
		15:30 ~ 16:00	クライネンブロイヒへバスで移動
クライネンブロイヒ	16:00 ~ 17:30	【クラブ視察②】 「コルシェンブロイヒ・シニア世代スポーツクラブ」 - クラブプレゼンテーション -	
	18:00	ドイツボーリング (ケーゲル) ・夕食懇親会	

日付	場所	時間	プログラム内容
10月30日 (水)	グレーヴェンブロイヒ	9:00 ~ 10:30	【講義⑤】 「クラブマネジメント」 - 最新の傾向・発展 - - クラブの現場実務 - 講師：ノイス市スポーツ連盟事務局長 ゲスタ・ミュラー氏
		10:45 ~ 12:30	【講義⑥】 「スポーツクラブの資金調達」 - 収入と支出 - - 財政計画 - - 助成金・寄付金 - 講師：TV ヤン・カペレン体操クラブ会長 ヴィンフリート・シュミット氏
		12:30 ~ 13:30	昼食
		14:00 ~ 16:30	【講義⑦】 「ライン・ノイス郡スポーツ連盟」 - スポーツクラブ の利益を代表 課題、目標、活動 - 講師：BV ヴェックホーフェン理事長 ライン・ノイス郡スポーツ連盟理事長 トーマス・ラング氏
		18:30	【クラブ視察③】 「オルケン体操クラブ」 - クラブ活動体験 - 引き続き夕食懇親会
10月31日 (木)	グレーヴェンブロイヒ	9:00	ケルンへ移動
	ケルン	10:00 ~ 12:00	ケルン市内見学
		12:30 ~ 13:30	昼食
		14:00 ~ 15:00	ケルン体育大学視察
		15:30 ~ 17:00	FC ケルンスタジアム視察
		17:30	グレーヴェンブロイヒへ移動
グレーヴェンブロイヒ	19:00	夕食	
11月1日 (金)	グレーヴェンブロイヒ	9:00 ~ 10:30	【講義⑧】 「スポーツクラブの健康志向コース」 - 健康志向スポーツプログラム・コース提供 - 講師：ライン・ノイス郡スポーツ相談課長 アクセル・ベッカー氏
		10:45 ~ 13:00	【講義⑨】 「スポーツクラブと学校の連携」 講師：学校スポーツ委員会事務局長 ギーゼラ・フーク氏
		13:00 ~ 14:00	昼食
		14:00 ~ 16:30	【最終講義】 「質疑応答・評価・まとめ」 講師：ライン・ノイス郡スポーツ相談課 アクセル・ベッカー氏 ほか
	ノイス	19:00 ~ 21:30	答礼夕食会
	デュッセルドルフ	21:30	デュッセルドルフへ移動
11月2日 (土)	デュッセルドルフ	9:00	デュッセルドルフ国際空港へ移動
		9:30	デュッセルドルフ国際空港着
		11:45	フィンランド航空 2704 便にて ヘルシンキ・ヴァンター国際空港へ
	ヘルシンキ	15:10	ヘルシンキ・ヴァンター国際空港着
		17:20	フィンランド航空 073 便にて成田空港へ
11月3日 (日・祝)	成田	10:05	成田空港着
			解散



派遣先MAP

Bundesrepublik Deutschland
Land Nordrhein-Westfalen

ドイツ連邦共和国

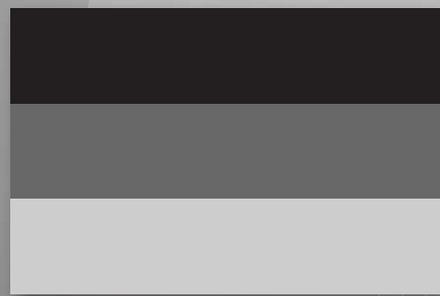


ノルトライン=ヴェストファーレン州





講義概要



社会の発展とスポーツ

ーポスト工業化社会でのスポーツとスポーツクラブの役割ー

講師：フォルカー・リットナー氏
(ケルン体育大学特任教授)

I

講義概要



講義1 講師：フォルカー・リットナー氏

1. スポーツ構造の変化

(1) 写真から見るスポーツニーズの変遷

・1960年代まで

1816年にドイツで最古に設立されたハンブルクの体操クラブの活動風景写真では、規律正しい姿の選手が映っている。彼らの表情は非常に真面目であり、服装についても運動機能を重視したものとなっている。1960年代以前においてドイツ人はスポーツに対して「規律」「運動」「競技性」を求めている。

・1970年代

1970年代からは、スポーツに対して「美的感覚」を求めるようになってきた。雑誌等には、スポーツをする姿がより美しく見えるように撮影された写真が掲載されている。

・1980年代

1980年代からは、スポーツに対して「エロチシズム（性愛・情欲を呼び起こす性質のこ

と）」を求めるようになってきた。スポーツウェアについて、肌の露出が多い服装が増えてきた。

・1990年代以降

若者の「冒険心」を高揚させるような表現や中高年層の健康志向を意識した写真が雑誌等で掲載されている。

このようにドイツ人のスポーツニーズは時代とともに変化しており、1960年代までは「競技性」というニーズが強い傾向にあったが、近年にはスポーツを通じて「楽しむ」「美しさを求める」「健康を求める」というニーズが強くなってきている。とりわけ「健康」に対するニーズが高まっている。ドイツ国内のスポーツニーズに関する調査によると、「なぜスポーツをするのか」という問いに75%以上の人々が「競技」以外の目的でスポーツを行っていることが分かった。当該調査によると、スポーツをする目的として「健康のため」と回答した人が最も多く、「競技のため」と回答した人は全体の11番目であった。

(2) スポーツをする「場」とスポーツをする「年齢層」の変化

従来、ドイツではスポーツを行う場としてはスポーツクラブが大半を占めていたが、2007年の調査では、「スポーツを個人で行う、または友人・知人で行う」と答えた人が「スポーツをクラブで行う」と答えた人の2倍以上となり、現代ではスポーツを個人的に楽しむ傾向が強くなってきている。

また、従来はスポーツを行う年齢層は青少年が大半を占めていたが、2001年に行われた「定期的にスポーツを行う人口の増加率」の調査によると、1985年の数値を100%とした場合の増加率は「24歳以下」が12.3%の増加に対して、「55歳から64歳」の増加率が89.7%となっており、高齢者層のスポーツ実施率が高くなっている。また、「性別に見たスポーツを行う人口の増加率」では全ての年代で女性の増加率が男性の増加率を上回っている。

2. 現代社会の構造的問題

(1) 現代人が抱える健康問題

ドイツ国民が抱える健康問題に関する調査では、58.8%が背骨や関節の痛みを訴えている。これらの健康問題に対する対応策としては、「1位：運動を行う」「2位：食事や栄養に気をつける」「3位：病院へ通う」となっていた。

また、ライン・ノイス郡エッセン市で行った就学前児童の運動能力に関する調査によると「調整力」に障害を抱えている子どもが増加傾向にあることが分かった。郡ではこの問題に対して、幼稚園で働く保育士に運動療法について指導したところ、子どもたちの「調整力」の向上が見受けられた。

このように現代人が抱える健康問題に対する対応策として「運動・スポーツ」が選ばれていることが分かった。

(2) 市民活動（ボランティア活動）を行う場所

ドイツ国内における市民活動を1999年と2004年で比較した調査によると、市民活動を行う場所

としては、「運動・スポーツ」分野が1999年と2004年ともに全体の40%で第1位である。このことから、市民活動（ボランティア活動）を行う場所としてスポーツ分野が最も活用されていることが分かった。

3. ポスト工業化社会におけるスポーツクラブの役割

ポスト工業化社会におけるスポーツクラブの役割を考える時、次の7つの視点が挙げられる。

- (1) スポーツの変化は社会的な変化を指し示す。
現代スポーツにおいて目に見える変化があった場合、それは人々の生活の質が変化したことを指している。
- (2) スポーツクラブがポスト工業化社会において人々が求める社会資本を生み出す中心的な役割を果たす。
- (3) スポーツクラブは次の5つの機能を有しており、人々のより豊かな生活の実現に寄与する。
 - 1) 個々人の存在意義を認識させる機能
 - 2) 人々と社会を結び付け統合する機能
 - 3) 人々の健康を増進する機能
 - 4) 人々が自身のライフスタイルを発見する機能
 - 5) 人々の社会参画やボランティア活動を促す機能
- (4) スポーツクラブは組織としての学習を通じて、社会環境の変化に適切に対応する必要がある。
- (5) スポーツクラブや地域社会がネットワークを構築することによって、スポーツの発展や活性化を促すことになる。
- (6) スポーツやスポーツクラブがより発展するためには専門性を高める必要がある。地域社会においてスポーツクラブが学習を進める上では、次の4つの能力が必要となる。
 - 1) スポーツという媒体を代表する能力
 - 2) データ収集・分析能力
 - 3) 諸領域にわたってプレーする能力
 - 4) ネットワークの舵取りをする能力

(7)ポスト工業化社会における諸問題に対して、スポーツとスポーツクラブが有する社会統合機能や福祉向上機能が、今後より一層求められてくる。

【報告：磯田 大治】

ライン・ノイス郡のスポーツ

ードイツのスポーツシステムー

ーライン・ノイス郡のスポーツとその発展ー

講師：アクセル・ベッカー氏
(ライン・ノイス郡スポーツ相談課長)

I

講義概要



講義2 講師：アクセル・ベッカー氏

1. ドイツのスポーツシステム

(1) ドイツ社会の人口構造

ドイツの人口構造に関して、ドイツでは日本と同様に少子高齢化を迎えている。また、人口分布に関しては、旧東ドイツ地域の人口減少が著しい一方で、大都市部周辺に人口が集中している。これは、産業の中心がこれまでの重工業から知の産業（IT産業等）へ徐々に移行しつつあることに起因する。これらの事柄は少なからずスポーツ環境にも影響を及ぼしている。

(2) ドイツにおけるスポーツと法

ドイツの憲法である基本法には、「市民にスポーツクラブを創る権利」について記されている。また、スポーツクラブについて定めた法律である「クラブ法」においては、非営利、会員数が7名以上等の一定の条件を満たせばスポーツクラブを法人化できると記載されている。クラブ名に「e.V」が記載されているクラブは、法人登記

されていることを指しており、登記されたクラブについては、税制面等の優遇措置を受けることができる。

(3) ドイツスポーツ界の構造

ドイツスポーツ界の構造は、「家」に例えることができる。その家の土台にあたる部分が、「国民(市民)」である。国民の上に位置するものが「スポーツクラブ」である。スポーツクラブの上に位置するものが、「スポーツ連盟」及び「各種目別競技団体」である。スポーツ連盟と各種目別競技団体は、郡や市単位で組織されており、郡や市内のスポーツクラブを統括している。郡や市の上位に州のスポーツ連盟や各種目別競技団体があり、国レベルでは「ドイツオリンピックスポーツ連盟(DOSB)」が存在している。

このように、ドイツのスポーツ界は「スポーツ連盟」と「競技団体」という2つの柱で構成されている。両者はいつも協働できているわけではなく利害が衝突することもある。

2. ライン・ノイス郡のスポーツ

(1) ライン・ノイス郡におけるスポーツクラブの現状

①クラブ数

ライン・ノイス郡には、スポーツクラブが356あり、約12万3,000人の住民がクラブ会員となっている（郡人口の1/4に相当する）。クラブは、郡や市のスポーツ施設を無料で使用することができる。

②クラブ規模

クラブの会員数に関しては、ドイツ国内の人口が減少しているにもかかわらず大きな現象が見受けられない。郡内のクラブについては、会員数が300名以下のクラブが66.5%、301名～1,000名以下のクラブが26.5%、1,001名以上のクラブが7%となっている。会員数1,001名以上のクラブの中には、6,000名いるクラブもある一方で、会員数300名以下のクラブの中には、解散してしまうクラブもある。解散したクラブの主な理由については、以下の通りである。

- ・スポンサーからの支援がなくなった。
- ・魅力あるスポーツプログラムを展開できなかった。
- ・クラブスタッフの高齢化に伴い活動できなくなった。

③クラブの組織形態

ドイツのクラブでは、その運営主体はほとんどがボランティアであり、クラブマネジメントに関わる理事長、事務局長、経理責任者等もボランティアである。しかし、近年では事務局長や経理責任者の仕事は、その専門性と多くの時間を要求されるようになりボランティアで対応することが難しくなっている面がある。会員数が多いクラブによっては、専任スタッフを雇用している場合もある。ライン・ノイス郡の場合、ボランティアでクラブに関わっている人は約4,500名であり、指導者やクラブマネージャーとして専任で関わっている人は約150名という状況である。

*ボランティア活動を行う理由について

ライン・ノイス郡の調査によると、住民がボラ

ンティア活動を行う理由としては、主に以下のことが挙げられ、ボランティア活動の場所はそのほとんどがスポーツクラブである。

- (1) ボランティア活動を行うことが楽しいから
- (2) 気の合う仲間と集まることができるから
- (3) 人のために活動を行いたいから

(2) ライン・ノイス郡におけるスポーツクラブ支援の現状

①ライン・ノイス郡スポーツ連盟

ライン・ノイス郡スポーツ連盟は、1962年に128クラブ（総会員数1万3,500名）が集まり設立され、1990年から専任スタッフを雇用している。また、1992年より加盟クラブは郡スポーツ連盟に対し会費を支払っている。郡スポーツ連盟の運営は、加盟クラブからの会費収入、上部団体である州スポーツ連盟や行政からの補助金・助成金、クラブ関係者に対する研修会参加料や指導者資格認定による登録料により賄われている。

②ライン・ノイス郡の行政

ドイツ国内は16の州に分かれており、州はスポーツを含む文化面や教育に関しては独立した権限を有している。ライン・ノイス郡があるノルトライン・ヴェストファーレン州には54の郡と市がある。スポーツクラブに対して直接的な支援を行うのは郡や市であり、各クラブで開催しているスポーツ教室等への指導者謝金に対する補助を行っている。この補助を受けるためには、郡スポーツ連盟が認定する指導者資格を保有している必要がある。たとえスポーツ選手として素晴らしい成績を収めている場合であっても有資格者でなければ補助は行わない。

(3) ドイツのスポーツ、スポーツクラブが直面する課題

現在、ドイツのスポーツ、スポーツクラブが抱えている主な課題は以下の通りである。

①学校における全日制の導入

ドイツの学校では、これまで半日制を取り入れていたが近年全日制を導入するようになった。そのためクラブとしては学校施設の利用時間が減少するだけでなく、子どもたちがクラブで活動する

時間も減少している。

②クラブ間の連携・協働

ドイツでは、ボランティア活動を行う人口が減少しており、運営主体がボランティアであるクラブ、特に活動規模が小さいクラブにとっては活動停滞になる可能性がある。そのため、複数のクラブが集まって運営する等の取り組みが求められる。

③クラブ関係者の専門性

近年、クラブマネジメントに携わる事務局長や経理責任者については、多くの時間とその専門性が要求されるようになってきた。彼らの能力を高める取り組みが今後求められる。

これらの課題解決のためには、スポーツクラブやクラブを支援する団体の取り組みが重要となってくるが、クラブが築いた長い歴史と伝統がそれを阻害している面がある。

【報告：佐久間 秀晴】

FIT for JOB

—企業に対するクラブのオファー—

講師：アクセル・ヴェルツ氏
(TSV バイヤー ドルマーゲン)

I

講義概要



講義3 講師：アクセル・ヴェルツ氏

1. TSV バイヤー ドルマーゲンの概要

- ・クラブ設立：1920年
- ・化学工業会社であるバイヤー社より多額の寄付金を受けながら運営。
- ・バイヤー社と地域住民が住む地域の間地点にバイヤー社から敷地を譲り受け、サッカーやバレーボールを行う施設を建設した。
- ・サッカーをはじめ多くの種目でオリンピックや世界選手権でメダルを獲得できるトップアスリートを育成している。そのことによりバイヤー社の知名度向上に貢献している。
- ・学校やケルン体育大学と連携して子どもの発育・発達に向けた取り組みも行っている。

2. FIT for JOB

クラブは、バイヤー社からの寄付金とクラブ会

員1人あたり16ユーロの月会費により運営されている。しかし、学校制度改革（半日制から全日制への変更）や労働環境の変化（女性の社会進出等）により、クラブ運営の維持にも大きく影響してきた。そこで、これまでトップアスリートを育成してきた経験等を活かして、企業が従業員の福利厚生として行う、健康面の維持・増進に係る取り組みをクラブが支援する事業「FIT FOR JOB」が創設された。

3. グループディスカッション

クラブが企業で働く従業員の健康面の維持・増進に向けて取り組むことができる事項について検討する上で、2グループに分かれグループディスカッションを行った。

[A グループ]

■ テーマ：「企業で働く従業員にはどのような負荷が発生するか」

■ A グループの発表：

職種を営業職と設定して営業職が抱える身体的及び精神的な影響について検討した結果、営業職は心身ともに多くのストレスを受けていることが考えられた。

■ ヴェルツ氏による講評：

精神的にストレスが蓄積すると頭痛等身体的な影響が出てしまい、仕事に対するモチベーションも下がってしまう。一般的に年齢が上がり上位の役職に就くと負荷も大きくなり、負荷が大きくなると成果を上げることが難しくなる。成果が上がらなければ企業にとっても損失であるので、企業としては、いかに従業員の負荷を軽減できるかが重要である。

【B グループ】

■ テーマ：「スポーツクラブのクラブマネージャーとして、企業で働く従業員が抱える健康面の問題を解消するために何ができるか」

■ B グループの発表：

クラブが保有するノウハウ等を活用して次のような取り組みが可能であると結論づけた。

- ①運動プログラム等の企画・立案
- ②企業が保有する施設の有効活用に関する提案

■ ヴェルツ氏による講評：

クラブが企業に対して提案する際には、企業が持つ資源を分析し、その資源の効果的な活用方法

を見出すことが重要である。また、クラブが運動プログラム等の提供を通じて、企業とクラブという組織間の交流を行うことが重要である。それは活動領域が異なる団体同士で交流を持つことによって新たなアイデア等が生まれるからである。

■ ヴェルツ氏による総評：

運動・スポーツをすることは、従業員の健康状態を向上させることができ、仕事面においても、業務上の負荷を克服し、仕事に対して意欲的に取り組むことができる。また、従業員が抱える健康問題については、心身に異常が生じた場合に、運動・スポーツによってその異常を解消するだけでなく、健康面で問題が出ないような職場環境の構築が重要となってくる。そういった職場環境の改善に向けた提案もクラブ側から行うことが今後望まれる。

4. 質問応答

Q：TSV バイヤードルマーゲンでは、企業に対してメンタル面のプログラム提供を行っているか。

A：クラブでは主に運動プログラムの提供を行っているが、メンタル面の指導については、専門医や産業医と連携しながら対応している。



アクセル・ヴェルツ氏の実技演習



グループディスカッションの様子

5. 運動処方の実技演習

ヴェルツ氏が指導の現場で行っている運動処方について実演を行った。

・体のゆがみの矯正

仰向けに寝た際の両足の長さの左右差を観察することで、日常の仕事や運動によって出ている体のゆがみを確認することができる。異常があれば施術し左右対称となるように整えていく。その際に、体のゆがみが発生した原因等について分析を行っている。

【報告：野田 ひろみ】

市町村のスポーツ振興

講師：ハンス・ペーター・バルター氏
(コルシェンブロイヒ市スポーツ課長)

I

講義概要



講義4 講師：ハンス・ペーター・バルター氏

1. コルシェンブロイヒ市の概要

(1) 人口

33,000人（内、50歳以上が13,000人、15歳以下が5,500人）地域住民の多くは近隣の大都市であるデュッセルドルフ市で働いている。

(2) 行政

職員数300人（内、学校教育とスポーツを主管する職員は13人〔スポーツ担当職員は3人〕）

(3) 学校施設

基礎学校（10歳までが通う）…6校
11歳～18歳までが通う各種学校…3校

2. 市内のスポーツ環境

(1) スポーツクラブ

38クラブ（州スポーツ連盟に加入している）
* 38クラブの内、32クラブが市スポーツ連盟に

加入している。

- * 市スポーツ連盟に加入していない6クラブの内訳…ゴルフクラブ（3クラブ）、乗馬クラブ（2クラブ）、釣りクラブ（1クラブ）
- * 活動種目数について、単一種目のみ提供するクラブから複数種目を提供するクラブまでである。

(2) スポーツクラブに所属している人口

11,200人（全人口の33.9%、男女比率は50%ずつ）

(3) スポーツ施設等

- ・ 体育館
15か所（内、1か所がクラブ所有であり、その他は市が所有）
- ・ 屋外スポーツ施設
6か所（サッカー場）、3か所（陸上競技場）
* すべて市が所有
- ・ その他
テニスコート [31か所]、射撃場 [18か所]、馬術場 [10か所]、ボーリング場（ケーゲル）

[4か所]

(4) 市を代表するスポーツ種目

- ・ハンドボール。ドイツ国内の3部リーグでプレーするチームがある。
- ・その他（陸上競技、水泳、馬術で優秀な成績を取めている）

3. 市が行うスポーツ施策

(1) 市内スポーツ施設の管理業務

(2) スポーツイベントの開催

(小学生を対象とした水泳大会、市民マラソン大会、陸上競技大会)

- ・市民マラソン大会は、25年の歴史がある国際的なマラソン大会である。2013年の大会では26か国から参加があった。また、大会開催にあたり企業から70,000ユーロの寄付を受けている。

(3) 市民に対するスポーツの相談対応

(4) 市内クラブに対する助成制度

- ・市のスポーツ関連予算：
年間約100万ユーロ。その内約40,000ユーロをクラブへの支援金として使用している。また、州からも年間80,000ユーロのスポーツ振興予算が補助されている。

*クラブに対する支援内容

- 指導者に関する研修会参加費の負担（100%）
- 指導者資格取得に係る講習会参加費、交通費の負担（100%）
- スポーツ用具費の負担（250ユーロを超える場合、その25%を負担）

*市内クラブが支援を受けることができる条件

- ①非営利の活動を行っていること
- ②クラブ事務局が市内にあること
- ③クラブ名に市の名前が入っていること
- ④州、郡、市のスポーツ連盟に加入していること

⑤ボランティアで運営されていること

⑥過去に税制面で問題を起こしていないこと

4. 社会環境の変化に伴う対応

(1) 社会環境の変化

- ・クラブ会員の高齢化
- ・クラブ会員の意識の変化（クラブは参画するものではなく、サービスとして利用するという考え方をを持った住民が増えている）
- ・クラブ役員の高齢化、若年層がクラブ運営に携わらない

(2) クラブの対応策

- ・クラブの合併
- ・市所有のスポーツ施設等のクラブへの委託
- ・ケルン体育大学との共同プロジェクト
- *フォルカー・リットナー氏と共同でスポーツ環境が整備されていない地域におけるスポーツ活動の活性化に向けた取り組みを行っている。

【報告：本田 高一】

クラブマネジメント

—最新の傾向・発展— —クラブの現場実務—

講師：ゲスタ・ミュラー氏
(ノイス市スポーツ連盟事務局長)



講義5 講師：ゲスタ・ミュラー氏

1. ノイス市の概要

(1)人口：154,000人

(2)市内のスポーツクラブ：110クラブ

スポーツクラブに所属している人口：
33,000人

*クラブの規模については、会員数が7人のクラブから5,500人のクラブまで幅広く存在している。また、クラブが行う活動種目についても、単一種目のクラブから多種目のクラブまで様々である。

2. 現代スポーツが抱える課題

クラブマネジメントを考える上で重要なことは、現代社会においてスポーツが抱える課題を把握することである。現在、ドイツ社会においてスポーツが抱える課題として次のことが挙げられる。

(1)学校制度改革

4～5年前より学校制度が半日制から全日制となったことで、クラブ側から見れば、子どもたちが過ごす午後の時間を学校に奪われた状況になっている面がある。

(2)少子高齢化

ドイツは世界で日本に次いで2番目に高齢化が進んでいる国であり、クラブには高齢者に対する質の高い指導を行うことによって、生活の質を向上させることが求められる。しかし、クラブが高齢者に対する取り組みを行う上では、高齢者に適したスポーツ施設の不足という問題がある。

(3)移民者のスポーツ

移民のスポーツについては、それぞれの国や宗教からくる生活習慣の違いから、男女が平等にスポーツに関わるできないこともある。これは、学校の授業の中で大きな課

題とされる。

(4)障がい者スポーツ

障がい者のスポーツについて、現在では障害のある人もない人も一緒にスポーツを楽しむもうとする考えになってきている。

TSV バイヤードルマーゲンであり、会員数が5,000人あり専任スタッフが5人いる。将来性のあるクラブであると言える。

【報告：斎藤 陽子】

3. 取り組みの方向性

このように、複雑な課題に加えボランティアの減少等クラブを取り巻く環境は厳しいものとなってきている。そこで、クラブマネジメントの観点でクラブが取り組むべき事柄は、クラブの活動全体を見直し、専門性を高める部分とボランティアの力を活かす部分とを整理していく必要がある。また、自分たちのクラブで使用しているスポーツ施設等について、行政から業務委託を受け管理したり、施設を買い取ることも考えられる。

クラブマネジメントを短期・中期・長期の期間で捉えたとすれば、短期的な目標として、障がい者や子ども、高齢者のスポーツ指導に関する専門性を高めることが必要である。中期的な目標としては、クラブの拠点施設管理を視野に入れた運営を行うことが必要である。さらに長期的な目標としては、クラブの「自立（独立）」と、短期的目標と中期的目標に向けた取り組みを繰り返していくことが必要である。

クラブが「自立」していくには、自分の地域やクラブをよく理解し、ボランティアのネットワークを活かしていかなければならない。また、スポーツやクラブの将来像を描き、行政とクラブがその将来像を共有しながら双方で努力する必要がある。そのために行政や政治家に対するロビー活動の専門性を高める必要がある。

4. 質疑応答

Q：クラブの「自立」について、現時点ではどの程度のクラブが自立できているか？

A：4クラブが自立していると言えるが、必ずしも競技力の高いチーム等を保有しているクラブばかりではない。自立している代表例は

スポーツクラブの資金調達

—収入と支出— —財政計画— —助成金・寄付金—

講師：ヴィンフリート・シュミット氏
(TV ヤン・カペレン体操クラブ会長)

I

講義概要

1. TV ヤン・カペレン体操クラブの概要

- (1) 設立年：1906年
- (2) 活動種目：25種目
- * 特定の種目に限定せず様々なスポーツプログラムを提供している。
 - * スポーツプログラムは年間 10,000 時間提供されている。
- (3) 会員数：約 1,500 人
- * 2000年までは約 2,000 人いた。会員数減少の原因としては、学校制度改革（半日制から全日制への変更）等が影響している。
 - * 新規会員の獲得に向けて、クラブ会員以外を対象としたスポーツプログラムの提供（当該プログラムへの参加者は年間約 500 名）や、近年、上昇している健康志向に対応するためにクラブ内指導者に対し関連する資格を取得するように促している。
- (4) 有資格指導者数：約 70 人
- (5) 所有施設：グレーヴェンブロイヒ市内の 16 施設を利用
- * クラブハウスが併設されたテニスコート（5 面）、野球場、屋内プール、フィットネスジム等

(1) 予算の作成について

TV ヤン・カペレン体操クラブでは、独立採算制を導入しており種目毎に経理部門があり各種目で予算を編成する。各種目別予算を合算した数値がクラブの予算となる。

(2) 決算について

TV ヤン・カペレン体操クラブでは、種目毎に決算を行い、前年度の繰越金は種目毎で次年度に繰越すことが認められている。各種目では、繰越金を用いて新規事業の開設等に活用している。

(3) 予算・決算の決定について

予算・決算については同クラブの総会において決定される。各種目で計画した予算・決算案を提示し、それらを積み上げてクラブ全体の予算・決算が決定する。

* 収入について

- 1) 会費：クラブ収入全体の約 50%
- 2) 寄付金：銀行からの寄付金 14,000 ユーロ（企業や個人からの寄付金はない）
- 3) 助成金：クラブ収入全体の 7.8%

[内訳]

- ・ 屋内プールの維持管理費として市から 2,500 ユーロ
- ・ 指導者への補助として州スポーツ連盟から年間 64 ユーロ
- ・ 指導者養成費として郡スポーツ連盟から年間 850 ユーロ

※助成金額は 2000 年以降減少傾向にある。

※指導者への補助については、有資格指導者が対象となり、クラブでは 70 人の指導者の内、26 人が対象となっている。

- 4) 施設利用料：クラブが管理するプール利用料

2. 財政計画 (2012～2013年の例)

〈収入の部〉

No.	科 目	金額 (ユーロ)
1	会費収入	137,900
2	施設使用料・寄付金・助成金	163,650
	合 計	301,550

〈支出の部〉

No.	科 目	金額 (ユーロ)
3	職員給与	44,000
4	機材経費	24,270
5	光熱水費	75,850
6	消耗品費	1,830
7	郵便費	3,010
8	電話代	1,810
9	家賃・借地代	7,640
10	事業保険料	7,600
11	職員保険料	3,000
12	運転手手当	200
13	資産の減価償却費	3,950
14	指導報酬費	500
15	会議費	100
16	スポーツ用具費	8,500
17	スポーツ連盟 加盟料	10,170
18	税金	4,900
19	広告料	5,080
20	イベント謝金	10,550
21	指導者補償金	58,100
22	事業報告経費	1,000
23	研修費	1,700
24	記念品等	1,750
25	組織への助成金	100
26	スポーツ事業交通費	1,150
27	各種目への補助金	4,500
28	審判費用	1,600
29	その他経費	1,050
30	予備費	17,640
	合 計	301,550

*支出について

支出の半分が屋内プールの維持管理費に充てられている。スポーツ施設の中で屋内プールは維持管理費に膨大な予算が必要となる。維持管理費について市からの補助は年々減少しているが、クラブが屋内プール運営を継続する理由は、地域のスポーツ環境を維持するため行政に代わって責任を担っているというメッセージを発信し、クラブに対する良いイメージを宣伝することにつながるからである。

価であり、クラブ運営は会費を中心に考える必要がある。行政からの補助金等はいくまで補助的な資金として考えることが原則である。

【報告：岩淵 裕美子】

3. 屋内プール運営に関する問題と解決策

屋内プール運営に関しては、燃料費、保全費に多額の費用がかかるため赤字を出さずに運営することは不可能であると言われている。そこで、クラブでは市長、議会、行政担当者に対して、様々なイベント等を利用してクラブの現状を訴え、シュミット氏自身も年間300時間、政治家に対するロビー活動を展開している。その結果、2011年よりプールの維持費に関する補助金を獲得することに成功した。

4. 質疑応答

Q：日本では市が所有する施設をクラブが管理していても、管理に係る経費を行政からいただけない場合がある。その場合はどのようにすれば良いか。

A：地元のマスコミを活用したり、ロビー活動を通じて、クラブの現状を訴えることが望ましいと考えられる（地元新聞紙等）。

5. 最後に

クラブの会費について考える時には、クラブの収支状況だけでなく、政治的、社会的な情勢を考慮した上で金額を決定することが必要である。会費とはクラブ会員がクラブ活動に対して支払う対

ライン・ノイス郡スポーツ連盟

—スポーツクラブの利益を代表 課題、目標、活動—

講師：トーマス・ラング氏

(ライン・ノイス郡スポーツ連盟理事長)

○トーマス・ラング氏について

トーマス・ラング氏はライン・ノイス郡スポーツ連盟理事長に3年前から就任している。また、ライン・ノイス郡が属するノルトライン・ヴェストファーレン州スポーツ連盟の副会長も務めており、保険と財務を担当している。さらには、800人の会員を有するBV ヴェックホーフェンの理事長としても活動している。

郡スポーツ連盟に加盟しているクラブの会員については、郡内のスポーツ施設を無料で利用できる。

1. ライン・ノイス郡のスポーツシステム

(1) ライン・ノイス郡の概要

ライン・ノイス郡は2町6市（ドルマーゲン市、グレーヴェンブロイヒ市、コルシェンブロイヒ市、ノイス市、カールスト市、メアブッシュ市、ユッヘン町、ローマースキルヘン町）で構成されており、人口は450,000人である。

(2) ライン・ノイス郡内のスポーツクラブ

郡内には350のスポーツクラブがあり、クラブに所属しているメンバーは120,000人。クラブ会員数については、12人のクラブから6,000人のクラブもある。クラブの多くは地域住民により設立、運営されており、一部警察や郵便局、鉄道等で公務員が組織するクラブは存在するものの、日本のように企業や大学が運営するクラブは存在しない。

(3) ライン・ノイス郡内のスポーツ連盟

郡内のすべての市町にスポーツ連盟があり、ノイス市スポーツ連盟事務局長のゲスタ・ミュラー氏のみが専任（有給配置）で、その他の市町のスポーツ連盟の役職員については、全員がボランティア（無給配置）で活動している。郡スポーツ連盟では5名が専任スタッフであり、残りのスタッフがボランティアである。

2. ライン・ノイス郡スポーツ連盟が行う指導者養成

ライン・ノイス郡スポーツ連盟では、クラブ内指導者を対象とした指導者養成制度がある。年間300種類の研修コースを提供しており、ライン・ノイス郡が属するノルトライン・ヴェストファーレン州内では最も多い。

研修コースについては、基礎コースであれば120時間の受講で取得することができ、4年間の有効期間内で各クラブでの指導が可能となる（受講費用は300ユーロ）。クラブマネジャーの養成講習会もあり、講習会では財政、法務税制、組織運営等の知識やノウハウを習得することができる。指導者資格の取得については、各クラブにおいても重要視しており基礎コースの受講費用である300ユーロをクラブで負担する場合が多い。郡スポーツ連盟では、指導者資格の取得を促進するために、資格取得の講習会を受講するクラブに対して、受講1時間あたり1.04ユーロを助成している。

3. ライン・ノイス郡スポーツ連盟が行う取り組みの成果

郡スポーツ連盟が行った取り組みの成果として次の事項が挙げられる。

- (1) クラブ内指導者に対して、質の高い研修の場を提供できている。
- (2) スポーツイベント等の紹介をメディアに対して行っている。

- (3) スポーツ振興について、行政や政治家と良好な関係を構築できている。
- (4) クラブに所属している 120,000 人の内 50,000 人が 18 歳以下の青少年であり、青少年へのスポーツ機会の提供が充実していると言える。夏休みの期間には、ヨーロッパで開催されるスポーツの世界大会等の視察に子どもたちを連れて行く等の取り組みも行っている。
- (5) シニア層のクラブ参加者が近年増加している。スポーツ活動に限らずクラブに集まって団らんする等の人々も増えてきている。
- (6) 指導者研修制度の充実により、ドイツ国内で行われるスポーツテストの成績も上位である。

4. ライン・ノイス郡スポーツ連盟が抱える課題

郡スポーツ連盟における課題としては次の事項が挙げられる。

- (1) 行政の財政難により、これまで無料で使用できていたスポーツ施設が有料化される傾向にある。会費収入が年間 80 ユーロほどのクラブにとっては大きな課題である。また、市レベルではスポーツをはじめとする文化面に関して予算化することが義務付けされていない点もクラブにとっては不利な状況となっている。
- (2) 学校制度が半日制から全日制となり、これまで午後からはクラブ活動の時間であったのが、現在は、午後 5 時以降にならないとクラブ活動の時間がとれないという状況にある。
- (3) ライフスタイルの変化に伴い、市民の余暇時間の過ごし方が変わっている。例えば、これまでクラブで午後 7 時から 9 時までスポーツをしていた人が、仕事の影響等により、夜遅くでなければ余暇時間がなく 24 時間営業の商業フィットネスクラブに通ってスポーツをするように

なっている。

- (4) 自由時間にコンピューターゲームをする子どもが増えている。また、子どもたちの親についても、子どものサポートとしてクラブに関わる機会が減少している。
- (5) 組織に所属することを好まない若者が増えている。また、若者がクラブに対して古いイメージを感じている。
- (6) 指導者、コーチを探すことが難しくなっている。

5. ライン・ノイス郡スポーツ連盟の将来に向けた取り組み

郡内スポーツクラブの今後の発展に向けては、次の取り組みが求められる。

- ・クラブ運営に有用な情報提供
- ・クラブ運営に対する的確な指導・助言
- ・指導者資格研修内容の充実

その他、クラブ同士の合併に向けた調整役や郡内のスポーツクラブの利益を守るために行う広報活動、政治家に対してのロビー活動も今後求められると考えられる。

6. 質疑応答

Q1：基礎コースの資格取得後に受けることができる資格はあるのか？

A1：基礎コースの資格取得後は、競技団体や郡スポーツ連盟において専門的なコースが提供されている。競技団体では、各種目の指導に係るコースを設定しており、郡スポーツ連盟では、子どもや高齢者等の年代やライフステージ毎のスポーツ指導に関するコースが設定されている。

Q2：資格取得後に資格保有者はどのようにしてクラブと関わるのか？

A2：指導者やコーチの名簿を、郡スポーツ連盟のホームページ等で掲載しており、郡スポーツ連盟に加盟しているクラブであれば検索できるようになっている。

Q3：資格受講費用をクラブが負担し、郡スポーツ連盟がクラブに対して助成金を出すという仕組みがあることは理解できたが、行政がクラブを支援する仕組みはあるのか？

A3：資格受講費用に限らず州レベルではクラブに対して補助金が出されている。市レベルではスポーツをはじめとする文化面についての予算化は義務付けされていないが、資格取得に係る費用の一部を助成する市もある。なお、郡スポーツ連盟が交付している助成金（1時間あたり1.04ユーロ）は、クラブにとっては大きな金額であると言える。

【報告：伊藤 智毅】

スポーツクラブの健康志向コース

ー健康志向スポーツプログラム・コース提供ー

講師：アクセル・ベッカー氏
(ライン・ノイス郡スポーツ相談課長)



講義8 講師：アクセル・ベッカー氏

1. 現代における「健康」の意味

従来、人々には現在のような「健康」という概念はなく、「体に問題がなければ幸福なこと」、「病気になるれば不幸なこと」というように、「健康」であるかどうかは運命的なものを受け止められていた。

近年の少子高齢化に伴い「健康」が社会的にも非常に重要性を帯びてきた。人々は喫煙・飲酒・対人関係等の様々なストレスにより健康に対するリスクを日々抱えながら生きている。これらのリスクによって健康上に問題が起こり得ることは周知の事実であり、40～50歳代以上の世代にとっては、特に深刻に捉えられている。

個人が「健康」を損なうことは、社会にも大きなダメージを与える。最近の社会的な傾向として、だれもが「『健康』はコントロールが可能なこと」、「『健康』は重要な財産であり、『健康』を維持するには運動と栄養が重要なカギであること」を認識している。そして健康を維持するためには以下

のことが必要である。

- 積極的かつ意識的に「健康」のために何かをすること
- 自分の健康に自分で責任をとること

2. 健康に関する社会的動向

長らく健康管理に関する事柄は医療分野の領域と考えられていた。健康管理におけるスポーツ(運動)の役割はあまり考慮されていなかった。しかし、病気予防・リハビリに関するスポーツプログラムが確立されその有効性が認識されるにつれ、近年は医療システムにスポーツも組み込まれるようになってきている。

健康保険会社が自ら健康スポーツのプログラム開発を行ったり、「ボーナスプラン」という保険加入者が健康コース等疾病予防のプログラムに参加すると還付給付金等の特典を受けられる仕組みがあり、病気の治療・リハビリ・予防の一環としてスポーツによる健康志向プログラムを積極的に

採用している。

また、健康志向スポーツを組織スポーツの第3の柱として確立することを目的として、ノルトライン・ヴェストファーレン州スポーツ連盟と内務省が共同で「行動キャンペーン2015『スポーツと健康』」という広報キャンペーンを行っている。この広報キャンペーンでは、健康志向のスポーツプログラムを一般に広報し、できるだけ多くの機会を利用して人々に働きかけ、自分の健康についての意識を高めさせることを目標としている。

そして最近では特定の企業をパートナーとして、社員及びその家族、地域住民の健康管理を主たる活動とする、健康志向に特化したクラブも現れている。

3. スポーツと健康の関連性

スポーツと健康の関連性を考えたとき、スポーツは万能ではなく、健康の維持促進のツールの1つに過ぎない。健康とは、個人的に勝ち得た生活のバランスを維持することができる能力である。健康とは日常生活の本質的な要素であって、個人的な生活目標となるだけのものではない。そうであるならば、スポーツは健康のどの側面に対して貢献できるのだろうか。以下の3点が挙げられる。

- 1) 身体の機能性
- 2) 日常的な身体能力
- 3) 個人的な生活形成

これらを踏まえて、健康志向のスポーツプログラムを提供する場合に中心となる目標が以下の6点である。

- 1) 身体的な健康資源の強化
- 2) 心理社会的な健康資源の強化
- 3) リスク要因の削減
- 4) 身体的な苦痛及び不調の克服
- 5) スポーツ活動習慣の構築
- 6) 運動状況の改善

以上の6つである。

4. 健康志向コースの提供

クラブとして健康志向コースの提供を考える場合、以下のように様々な側面から考えなければならない。

1) コースの設定

心臓疾患等のリハビリ系、社会的ストレスの克服、リラクゼーション系、高齢者の健康維持・増進、子どもの健康資源の強化促進、コーディネーショントレーニング、また運動以外（栄養等）の健康に関するコースを提供する必要がある。

2) 対象者をどのようにするか

3) 活動場所の設定

4) 連携体制の確立

幼稚園、学校、保険会社、企業、病院等（＝パートナー）と連携する必要がある。

5) 専門性を持った有資格指導者

資格、知識をもった人材（指導者・コーチ・スポーツプログラマー・栄養士等の専門家）がいることで、コースの信頼性、パートナーからの信頼を得られる。

5. スポーツクラブの基本条件

健康志向コースの提供に際し関係を結んだパートナーは以下のようなことをクラブに期待している。

- 1) サービス及び活発な活動の提供
- 2) 質の高いプログラム内容
- 3) 信頼性
- 4) 優れた組織性
- 5) 健康領域での要求全体に対する行き届いた配慮（法的規定等）

運動に関するコースを提供する団体の中で、スポーツクラブは最も良く認められた団体である。この地位を維持していくには、さらなる改善と発展の努力を続けていかななければならない。

6. クラブにもたらされるチャンス

健康志向コースがクラブにもたらすチャンスとして、以下のことが考えられる。

- 1) 会員の維持
- 2) 新しい年齢層の獲得
- 3) クラブ運営の柔軟性をアピールできる
- 4) 地域の力としてイメージが得られる
- 5) 有資格指導者の獲得
- 6) 他の健康関連団体との協力が得られる
- 7) 財政手段の獲得
- 8) 将来性の計画と保証

またクラブが健康関連分野での計画を立てるときに必要なものは以下の点である。

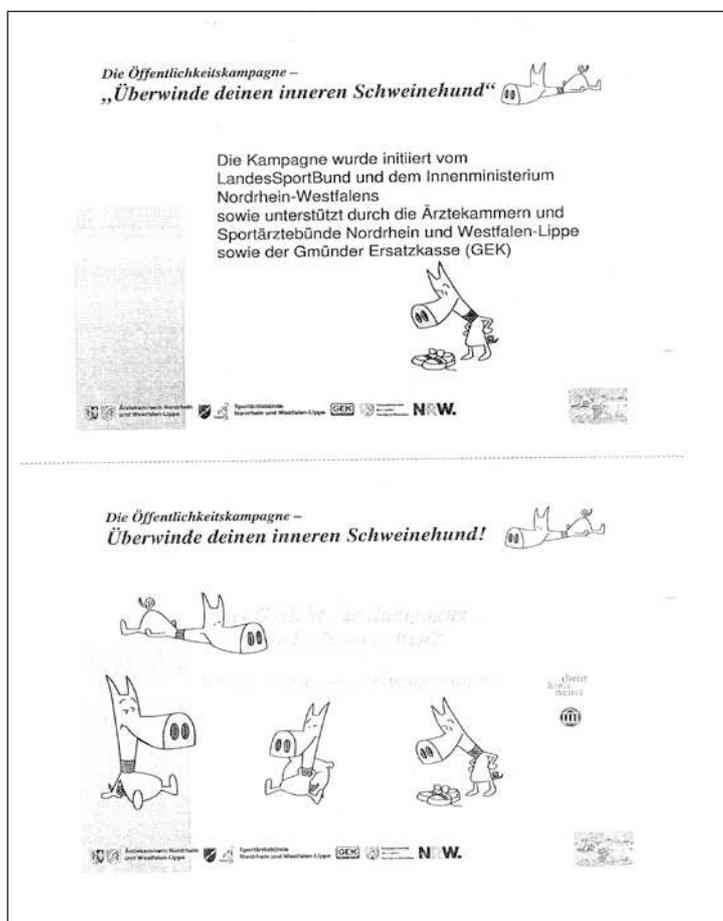
- 1) 人材（特に有資格指導者）

- 2) 活動場所、スポーツ用具
- 3) 組織と管理事務
- 4) マーケティングと広報活動

まとめとして、健康はますます重要性を増す社会的要因であり、健康志向コースは人々の健康をサポートするものである。ドイツにおいても、日本においてもこの健康志向コースはクラブの将来性を高めることに貢献する。

これからのクラブの成長戦略を考えたとき、健康志向コースはビジネスチャンスである一方で、商業的フィットネスクラブと競合しなければならず、これらコースのプランニング、組織、実施には体系的で品質を重視した取り組みが必要である。

【報告：藤牧 敏子】



スポーツクラブと学校の連携

講師：ギーゼラ・フーク氏
(学校スポーツ委員会事務局長)



講義9 講師：ギーゼラ・フーク氏

1. ドイツの学校教育制度

ドイツは各州が連合して1つの国を作っている連邦制の国家である。州の数は全部で16州あり学校教育制度の基本的な権限は州にある。教育庁(州)を頂点として、学校監督庁、学校課(市町村)、学校経営陣、最後に教師が配置され基本的な権限を持つ州からのトップダウン式となっている。

【幼稚園 Kindergarten】3歳～5歳

* 以前は義務教育だったが、数年前からは義務教育ではなくなった。

【基礎学校 Grundschule】6歳～9歳

(第1次教育：初等教育)

* 10歳以降の進路については、以下の4種類から選択する。

【本科(基幹)学校 Hauptschule】10歳以上

(第2次教育：中等教育)

* 5年制で職人や販売員を目指すための学校である。修了後は実務経験をしつつ、18歳ま

で職業学校に義務として通学し、卒業後は職業訓練や見習いとして就職する者が多い。

【実科学校 Realschule】

* 6年制で、卒業すると全日制就職学校である「専門上級学校」や「専門大学」等に進学でき、将来、事務職や専門職を目指す者が多い。実科学校の修了資格は経済界、官庁での中級職に相当する。

【ギムナジウム Gymnasium】

* 9年制で学力レベルが高く、大学進学希望者が進学する学校。最終学年まで進んで卒業試験に合格すると「アビトゥーア」取得の道が開かれる。

・「アビトゥーア」とは…ギムナジウムを卒業した後に受ける国家試験で生涯に2回しか受けることができない資格。

【総合学校 Gesamtschule】

* 9年制で多くは明確な進路を決めかねている子どもが進学し、修了後は適性に合った大学、専門大学、職業教育学校へ進学する。

「本科（基幹）学校」「実科学校」「ギムナジウム」という3つの学校形態をまとめた学校であり、早い段階で子どもの進路を決めてしまうことに対する批判などから設立された経緯がある。

2. 全日制導入の背景とスポーツクラブの状況変化

全日制導入前（2003年以前）の学校システムは月曜日から金曜日までの午前8時から12時頃までが授業で、13時以降の時間はそれぞれの選択によりスポーツクラブでの活動等で過ごす時間であった。しかし下記3点の背景から各州の判断で全日制導入を検討し、最終的に学校は15時まで授業を行うこととなった。

*全日制導入の背景

(1) 学習到達度調査

経済協力開発機構（OECD）による学力調査でドイツの子どもたちの学力レベルが世界第32位であり、他国に比べてその水準が低いことが判明した。

(2) 女性の社会進出

女性の社会進出が増えてきたことで、家で子どもの面倒を見ることができる時間が少なくなり、結果、学校等に子どもを預けるケースが増えてきた。

(3) 就職難

ギムナジウムの教育課程において就職率が下がっていることを受け、9年制から8年制に短縮し短縮分を全日制のカリキュラムへ組み入れた。

スポーツクラブとしては今まで13時以降の時間に学校を利用してスポーツ活動が行えていたが、現在では15時まで学校の授業がある。さらには、80%以上の学校が授業後に色々なコース（日本の部活動に類似した活動）を提供し3分の2の子どもたちが17時まで学校に残っている（両親が共働きの場合は、特に学校に残るケースが多い）。

このような状況からスポーツクラブはこれまで

通りの活動ができなくなった。特にプールと体育館を利用する種目については活動場所がなく、より多くの子どもたちを参加させたいスポーツクラブ側の状況が一転することとなり大きく転換することになる。

3. 全日制導入後の学校とスポーツクラブの連携

学校が2003年以降全日制を導入した後、学校側は午後の時間の活用方法について、スポーツクラブ側はクラブ活動時間の減少等への対応策について、それぞれの立場からの話し合いが持たれることになった。その結果、子どもたちの運動能力を向上させるという観点で学校とスポーツクラブが共通認識を持ち、週3時間の体育の授業にスポーツクラブの指導者を受け入れることや、放課後に学校で行われるスポーツ活動にクラブの指導者を派遣すること等が行われるようになった。

両者が連携するメリットとして、スポーツクラブ側は体育の授業をサポートすることで能力の高い生徒を見つけ、クラブにスカウトすることができ、また、学校側もスポーツクラブの専門的な運動プログラムを導入すること（多種多様なスポーツへの対応）で充実した体育の授業ができるようになった。

現在も絶えず最新情報を収集し、現状報告、分析、改善のための会議において学校、クラブ、行政の代表者が話し合っている。

4. 連携による学校、スポーツクラブの効果

(1) 学校の効果

体育の授業等において多種多様なスポーツプログラムが提供できることで、教育カリキュラムが発展的かつ魅力的なものになる。

(2) スポーツクラブの効果

多種多様なプログラムを体育の授業や課外のスポーツ活動等へ提供することで生徒をクラブに勧誘でき、継続的なクラブ運営が期待できる。

また、教育分野に関わることで社会的に信頼されるスポーツクラブになる。

(3) 相互効果

相互協力でスポーツプログラム、遊びのプログラム、生活スタイルに合わせたプログラム（健康志向のプログラム等）を提供することで青少年の健全育成を図ることができる。

5. 子どもたちによるボランティアスタッフとしての関わり

スポーツクラブの抱える課題の1つにボランティアの指導者の減少がある。減少の理由として支払う謝金（10ユーロ～20ユーロが相場）がないことや、学生ボランティア（無償）が少なくなってきたことが挙げられる。

この課題を解決するためにクラブでは学校と連携・協力した取り組みがなされている。それは子どもたちが「スポーツヘルパー」の資格を取得できるようにするシステムである。クラブで指導を行うため体育教員が取得することがある「スポーツヘルパー」の資格について、子どもたちでも取得できるようにしている。資格を取得するためには108ユーロの費用がかかるが、学校で取得講習会を実施することで費用が免除となり、子どもたちの積極的なクラブ運営への参加にも繋がっている。

また、ボランティア経験のある生徒が経験のない生徒を教えることもあり、この場合、教える側の生徒は次のステップの指導者資格を取得する際に優遇されるシステムがある。

6. 学校とスポーツクラブの連携における様々な支援

全日制導入に伴い、学校では午後の時間帯（課外）に行われる選択制のスポーツプログラムがあり、それをクラブが提供している。このプログラムは授業後における活動で、日本でいう部活動のような活動である。最近では音楽や料理、女子生徒のみ参加できる護身術のコースもある。自由参加で義務ではないが生徒の3分の2が参加してお

り参加率が高い。

* スポーツプログラムの一例

【放課後のスポーツコース】

楽しくスポーツを行うコース

週2時間で指導者謝金は250ユーロ

【運動を必要としている生徒のコース】

肥満児やスポーツ嫌いな生徒を対象としたコース

週2時間で指導者謝金は350ユーロ

【競技スポーツのコース】

競技力を向上させることを目的としたコース

週2時間で指導者謝金は900ユーロ

【報告：古田 政一】

質疑応答・評価・まとめ

講師：アクセル・ベッカー氏

(ライン・ノイス郡スポーツ相談課長)

講師：ヴィンフリート・シュミット氏

(TV ヤン・カペレン体操クラブ会長)

I

講義概要

1. グループディスカッション

今回の講義・クラブ視察で学び感じたことを踏まえて、日本の総合型クラブがおかれている環境等について、3グループに分かれてグループディスカッションを行った。

【Aグループ】

テーマ：総合型クラブの日本社会における社会的地位
総合型クラブに対する行政や政治の支援

【Bグループ】

テーマ：総合型クラブに関する物質的資源
(施設、財政)

【Cグループ】

テーマ：総合型クラブに関する人的資源
(人材、研修)

・クラブの「自立」の捉え方がドイツと日本では違いがある。

【Bグループ】

(施設について)

- ・クラブハウス、体育館、グラウンド等をクラブが所有することが望ましいが、現時点では難しい。
- ・会議室をスタジオとして使用する等既存施設の活用が求められる。
- ・スポーツ用品(消耗品)は、競技団体が大会やイベント等で使用した用具をクラブに譲っていただけるよう働きかける必要がある。

(財政について)

- ・日本の総合型クラブでは会費を徴収しているクラブは多いが、スポンサーや寄付金を得ているクラブは少ないと考えられる。
- ・スポーツ振興くじ(toto)助成金や行政からの補助金等、公的資金は存在するが助成金・補助金に依存しているクラブがある。

2. 発表

【Aグループ】

(総合型クラブの社会的地位について)

- ・総合型クラブの日本社会における社会的地位は低い。

(行政や政治の支援について)

- ・行政(地域)によって総合型クラブへの支援体制には温度差がある。
- ・ドイツのクラブと比較して、政治家や行政に対するロビー活動が少ない。

(その他)

- ・日本では「体育」と「スポーツ」という2種類の概念が存在する。

【Cグループ】

(人材について)

- ・総合型クラブに関わる人材…教員、スポーツ推進委員、スポーツ少年団の指導者、各種目別の有資格指導者
- ・指導者の年齢層…40歳代～60歳代が中心である。有資格指導者は20歳代～30歳代が多い。
- ・クラブスタッフの世代交代が進んでいない。

(研修について)

- ・公益財団法人日本体育協会、公益財団法人日本レクリエーション協会等、全国レベルの組織では指導者養成を行っているが、都道府県や市区町村レベルで独自の指導者養成システ

ムは持っていない。

3. 講評

(1) 日本のスポーツやスポーツクラブについて (アクセル・ベッカー氏)

- ・競技スポーツ中心のスポーツシステムであると考えている。
- ・スポーツ振興が行政主導（トップダウン）で進められてきた。
- ・政治家や行政に対するロビー活動が盛んでない。
- ・スポーツクラブで財政や活動拠点施設の確保について問題を抱えていないクラブはないが、日本の場合、公的資金が生涯スポーツに充てられる割合が少ないと思われる。

(2) ドイツのスポーツが歩んだ歴史について (ヴァインフリート・シュミット氏)

- ・ドイツのスポーツが歩んだ100年以上の歴史を振り返ると、まず体操（棒を使った競技）からスタートした。体操クラブが設立された当時は、周囲の人々から笑われた。
- ・1960年からの「ゴールデンプラン」により、スポーツ施設の建設が進み、クラブを支えるインフラが整備されたことでクラブ会員数が急激に伸びていった。ドイツのクラブは住民主導（ボトムアップ）で進んできたように思われるが、ゴールデンプラン自体は行政主導（トップダウン）で行われた。
- ・スポーツ文化の醸成には長い年月がかかるものであり、必ずしもトップダウンで進められてきた施策だからといって、今後、日本のクラブが地域に根付かないというわけではない。これからの頑張りが重要である。

を、ロビー活動を通じて訴える。クラブだけでなく、スポーツ連盟もロビー活動を行う。

Q: 行政はスポーツプログラムを提供するのか。

A: 行政は定期的なスポーツプログラムの提供は行わず、クラブ支援のみを行う。

Q: ドイツでは個人経営のスポーツ教室は存在するか。

A: そのような取り組みは行われていない。

Q: 25歳から44歳のクラブ加入率が低い理由はなぜか。

A: 仕事や家庭での活動が忙しいためであると考えられる。

Q: スポーツクラブ同士が合併した事例はあるか。

A: クラブ同士が合併した事例はある。

Q: スポーツクラブ間の連携はどのように行われているか。

A: 近隣のクラブ間では同じプログラムを提供しないという取り組みはなされている。

Q: ボランティアの高齢化について教えて欲しい。

A: 理事等の高齢化が進んでいる。今後は、時間と経済的に余裕のある人を集めることが必要である。

【報告：久本 成美】

4. 本研修全体に関する質疑応答

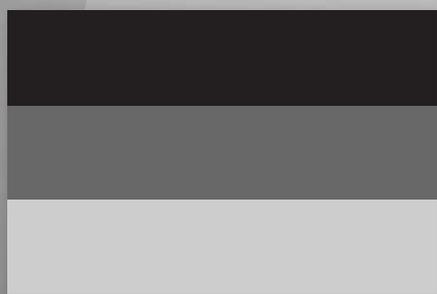
Q: 行政や企業からの助成金が減少していると聞いたが、クラブは行政や企業に対しどのような働きかけを行っているか。

A: クラブには助成金が必要であるということ



II

クラブ視察





10月28日(月) 18:00~20:00

TUS グレーヴェンブロイヒ

—サッカー部門—
—ユース育成コンセプト—

1. クラブの概要

「TUS グレーヴェンブロイヒ」は、1911年にヨゼフ・カセレン氏が若者を集めて設立されたクラブである。クラブはドイツの典型的なアマチュアスポーツクラブであり、サッカーを主要な活動種目としながら、バドミントンやバレーボール等も提供されている。特徴としては心臓疾患を抱えた人向けのスポーツプログラムが提供されている点である。クラブで最も成績が優秀である種目はビリヤードである。

今後クラブが目指していることは、グラウンドの芝生をハイブリッド型（天然芝と人工芝を混ぜたもの）に改修することである。

2. 質疑応答

Q：ハイブリッド型の芝生はいつ頃を目途に建設するつもりなのか？

A：グラウンドはクラブが使用しているが、町の所有物である。町からの予算も含めて2016年頃までに改修したいと考えている。

Q：クラブの年間予算はいくらか？

A：80,000ユーロである。

Q：財源の内訳はどのようになっているのか？

A：会費収入とスポンサー収入が多くを占めている。スポンサー収入については、サッカーのトップチームが試合をする際にパンフレットを作成し、そのパンフレットへの広告掲載料等がクラブの収益となる仕組みになっている。また、クラブハウスのバーカウンターでの売

上げもクラブ収益となる。

Q：トップチームの選手は仕事をしながら活動しているのか？

A：チームの大半は学生であるが、仕事をしながら活動している人もいる。普段は夕方から練習を行い、週末に試合を行っている。

Q：クラブハウスの所有者はだれか？

A：クラブの所有物である。グラウンドやそれに付随する更衣室等は町の所有物である。

3. ユース育成コンセプト

クラブには13のユースチームがあり、約140人の選手が活動している。年齢構成は4歳から17歳まで。クラブではドイツ1部のクラブチームである「フォルトナ・デュッセルドルフ」と業務提携しており、クラブに選手やコーチが指導に来ていただけるようになっている。

ユース部門の問題点として、

- ① 少子化による子どものクラブ会員の減少
- ② ボランティアの減少
- ③ 学校制度改革（半日制から全日制への移行）
- ④ クラブで提供していない種目を実施するクラブの増加
- ⑤ テレビゲームをする子どもの増加等が挙げられる。

4. ユースチームの監督・選手へのインタビュー

(1) 女子チーム

Q：練習はどの程度の頻度で行っているのか？

A：週2回（毎週火曜日、木曜日）活動している。
日曜日には試合を行っている。

Q：選手数はどの程度か？

A：24名である。

Q：チームの目標は何か？

A：2012年に5部リーグに昇格したことから、5部リーグで活躍できるようにすることが目標である。

Q：（ある女子選手に対して）なぜサッカー選手として活動しているのか？

A：4歳半からクラブで活動しているが、子どもの時にサッカーで感動したことが忘れられなかったから。

(2) 男子チーム（7部リーグで活動している）

Q：練習はどの程度の頻度で行っているのか？

A：週3回活動している。

Q：選手数はどの程度か？

A：22名である。

Q：（監督に対して）なぜチームを指導するようになったのか？

A：現役時代は国内3部リーグのクラブで活動していた。現役時代に指導者資格を取得し、現役引退後は指導者になることを決めていた。現役引退後、子どものころから育ったクラブから、監督就任の依頼をいただいたので快く引き受けた。

【報告：蛭沼 隆雄】



女子サッカーチーム



クラブハウス内のバーカウンター



数々の歴史ある写真



クラブが所有するグラウンド



10月29日(火) 16:00~17:30

コルシェンブロイヒ・シニア 世代スポーツクラブ

—クラブプレゼンテーション—

1. 歓迎の挨拶 シュルツ理事長

日本派遣団の受入れは5回目となり、毎年大変楽しみにしている。そして日本人は、講義時間中は非常におとなしいが、ケーゲルの時の興奮した表情や笑顔にはいつも大変驚いている。このクラブのスローガンは、「ひとりぼっちはいけない」であり、24時間誰かと会えることを目指して取り組んでいる。ドイツはヨーロッパで最も高齢化が進んでおり、日本と同じく様々な問題を抱えている。クラブは10名の理事で運営されており、皆がボランティアで、1週間のうち3~4日はクラブハウスに通っている。クラブハウスは、もともと地域の金融機関の空き建物をリフォームしたものであり、その一画を理髪店に賃貸している。

2. クラブ概要や プログラム紹介

(1) クラブ概要

クラブは1978年に設立され、今年35周年を迎えた。設立当時には、高齢者を対象としたクラブの数は少なかったが、今では同様のクラブが州内には40~50クラブ存在している。これからも益々増加することが予想される。

クラブには50歳から入会できる。現在、約800名が在籍し3分の2が女性、3分の1が男性となっており、最高齢の会員は93歳(2名)である。会費については、参加するコース、プログラムの数によって違いがあり、段階的に設定されている。



クラブ理事の方々



クラブハウスでの説明の様子

(2) プログラム紹介

1) スポーツプログラム

スポーツプログラムについては、ヨガ、ピラティス、気功、そして太極拳があり、音楽を聴きながらの運動は大変気持ちが良いそうだ。また、コーディネーションゲームとして脳の体操が取り入れられており、これは脳のシナプスに刺激を与えるものである。

近隣のリハビリクリニックと連携した医療・リハビリプログラムも充実している。週に3回の水泳コースが用意され、その他にも心臓病・高血圧症そして障害のある方が対象のコースがあり、これらのコースには医師も常駐している。その他、ノルディックウォーキング、自転車、そしてバレーボールも行われており、スポーツ以外にはオペラなどの観劇コースもある。イベントなどのお手伝いとして、近隣の老人会からもボランティアが多数協力してくれている。

高齢者向けのコースの指導者は、高齢者指導の研修を受けておりクラブからは謝金を払っている。バレーボールコースなどは、体力的に一年中行うことができないため、休み期間用の別のプログラムが準備されている。

2) スポーツ以外のプログラム

1年間に複数回小旅行会を開催しており人気のイベントである。年末年始には12日間の長期旅行も行われている（旅費は600ユーロ程度）。クラブでは旅行プログラムのための担当理事も配置されている。

また、交流事業として、毎月1回「インフォメーション・ブレックファースト（朝食会合）」を開催しており、毎回130名程度が参加している。

3. ケーゲル

クラブが提供するプログラムでもあるケーゲル（ドイツボーリング）を体験した。ドイツボーリングとはいえ、ボーリングとは大きくルールが異なり、9本のピンを倒すだけでなく、ピンの配置を変更することができる等奥深いゲームであった。ドイツでは長い歴史のあるスポーツだが、最近は少し人気に陰りが出てきているようだ。

【報告：岸田 昌章】



玄関にあるクラブの看板



ケーゲル場



10月30日(水) 18:30~20:00

オルケン体操クラブ —クラブ活動体験—

1. クラブの概要

(1) クラブについて

- ・会員数・・・800～850人
- ・1961年に旧体育館(畳敷きの武道場)を改修した。
- ・1991年に体育館・クラブハウスを改築した。
 - *ドイツのスポーツ施設の多くは行政の所有物であるが、オルケン体操クラブの施設はすべてクラブの所有物である。
 - *施設の改修や補修もすべてクラブの自主財源で行っている。
- ・クラブの財源については、会費とわずかな補助金で運営されている。

(2) クラブ施設について

- ・大体育館

日本の中学校体育館程度の広さがある。大体育館では様々な活動が行われており、特に女子体操は非常にレベルが高い。
- ・小体育館

畳敷きの武道場であり、クラブ会員たちの手作りで建築した。

訪問当日には、拳法クラブが活動していた。拳法クラブは、グレーヴェンブロイヒで唯一50年以上続いているクラブであり、オランダ人の指導者がいるためオランダとの交流が盛んに行われている。

・舞台設備

大体育館と小体育館の間に上下可動(約80cm)させることができる床があり、音楽発表会やコンサート開催時に観客席やステージとして使用される。この設備もクラブ会員の手作りで建築された。

・トレーニングルーム

筋力向上よりも健康・リハビリ目的で使用する人が多く自転車トレーニングもできる機器も設置されている。以前は、若者が集う部屋としてクラブハウスの機能があった。

・グラウンド

グレーヴェンブロイヒ市内で2番目に人工芝を使用したグラウンドであり、ナイター設備も備えられていた。訪問当日は青少年のサッカークラブが対抗試合をしていた。

・クラブハウス

クラブハウスは2階にあり、部屋の正面には壁一面にクラブのフラッグやトロフィー等が飾って



クラブの看板



クラブの音楽隊

ある。また、大型テレビや音響設備も設置されていた。バーカウンターには、ビールサーバーや壁一面にグラスが並べられている。

2. 理事の方々との懇親会

クラブハウスにおいて、クラブ理事の方々と夕食懇親会を行った。懇親会ではクラブ会員で組織する音楽隊に歓迎の演奏を行っていただき、派遣団はお返しとして「東京音頭」を踊った。

【報告：入江 能子】



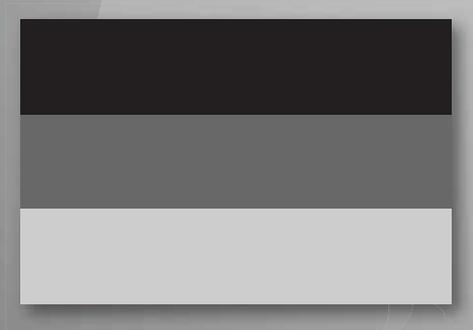
クラブが使用しているグラウンド



クラブが所有する体育館



団員レポート





磯田 大治

NPO 法人おにスポ
理事長

1. 「何のためにドイツへ行くのですか？」

「何のためにドイツへ行くのですか？」

これは、本事業の事前研修会（9月2～3日）で講師を務めた平成24年度派遣団員である西村貴之氏からの問いかけである。その問いかけに私は悩んでしまった。それは事前研修会を通じて、ドイツのクラブがおかれている現状が、私の思い描いていたような「夢物語」ではなく、財政面や人材面において日本と同じような課題に直面している事実を知ったからである。

その後、改めて考え直した結果、次の3つの課題を設定した。

- (1) なぜドイツのクラブは自立していると言われるのか。
- (2) ドイツのクラブでは次世代の人材育成がどのように取り組まれているか。
- (3) 日本の総合型クラブはボランティアを中心にしたクラブ運営を目指すべきなのか、それとも収益事業を増やしスタッフを雇用できるようなクラブ運営を目指すべきなのか。

2. グレーヴェンブロイヒの町並み

初めての海外渡航に加え、派遣団の成田集合日（10月26日）に台風が関東地方に直撃するという事態が起こり、私だけ25日のうちに東京に入ることになり、留守にする間の打合せ等を慌ただしく済ませ、荷物をまとめることになった。不安な旅立ちであった。

さて、26日には全員無事に成田に到着することができ、9月以来の再会を果たしたのだが、皆一様に緊張気味であり、会話もありふれたもので終始していたように思う。27日には、出国手続



きを行い長時間のフライトと乗り継ぎがあった。当時は皆に迷惑だけはかけないようにと願っていたことを思い出す。フライトは順調であったが無事にグレーヴェンブロイヒに到着した時はさすがに疲れを隠せなかった。

28日から本格的に研修が始まった。研修のほとんどはライン・ノイス郡庁舎で行われ、宿舎からは徒歩で往復するのだが、私はグレーヴェンブロイヒの綺麗な町並みと静かな雰囲気ですっかり気に入ってしまった。街を歩くと地域住民から「コンニチハ！」と気さくに声を掛けられ、皆人懐っこいように感じた。レンガ造りの住宅と石畳の歩道はテレビで見る光景そのまま、住んでみたいと思うほどであった。

3. いよいよ研修スタート

研修ではフォルカー・リットナー教授によるドイツのスポーツシステムやクラブ事情の概要に関する講義をはじめ、企業とクラブの連携（TSVバイヤードルマーゲンの取り組み）、行政とクラブの連携（コルシェンブロイヒ市の取り組み）、非営利法人としてのクラブ運営（コルシェンブロイヒ・シニア世代スポーツクラブの取り組み）等、

様々な立場や異なる視点からドイツのクラブ事情について学ぶことができた。

4. 課題解決のヒント

講義やクラブ視察を通じて、今回設定した3つの課題解決に関するヒントが見えてきた。

(1) クラブの「自立」について

「自立」という言葉の捉え方が、日本の総合型クラブとドイツのスポーツクラブでは異なることが分かった。日本の総合型クラブが目指す「自立」とは、「会費収入や参加料収入にもとづいたクラブ運営ができていない状態」を指し、そのことに加えて私は「クラブが上げた収益によりスタッフを雇用できるような状態」が「自立」であると考えている。

一方で、ドイツのスポーツクラブが指す「自立」とは、「クラブ関係者が自らの意思でクラブ運営の方向性を決定している状態」であるようだ。つまり、ドイツ人にとっては、「自ら立つ意思」や「立ち続けようとする意思」が尊重され、その意味において、金銭的な部分は二の次のようである。ドイツのクラブでは、私が考えているような「クラブを『仕事』としている方」は少ないことが分かった。

(2) 次世代の人材育成について

ドイツのクラブにおいてもクラブに関わる若者が社会環境の変化に伴い不足しているが、ベッカー氏によると、特にクラブマネジメントに携わる役職（理事長・事務局長・経理責任者等）に就いて活動する方が不足しているようだ。一方で、「クラブのために何か役に立ちたい」「クラブ運営を手伝いたい」という若者は依然として多数存在しており、スポーツプログラムに対する指導であったり、短期的なイベント事業に対しては若者も参加するようである。

「人材育成」という観点では、スポーツニーズが多様化する中でクラブ関係者の「専門性」を高める取り組みがなされているようだ。スポーツ指導やクラブマネジメントに関する「専門性」を高めるために、スポーツ連盟ではクラブに対して各

種研修会の開催や指導者養成を行っている。

(3) ボランティアとプロフェッショナル

ドイツのクラブにおいては、そのクラブ運営をボランティア中心で行っているクラブと専任スタッフを雇用しながら行っているクラブの両方が存在する。そして、ドイツでは「どちらかが望ましい」ということではなく、クラブとして「どちらを選択するか」が大事であると考えられている。どちらの方向性を選択するにしても、クラブの目指すべき姿を明確にすることが大事であり、最も望ましくないことはどちらともつかない中途半端なクラブ運営を行うことであるようだ。

5. 「選択」と「専門性」

今回の研修を通じて、最も重要であると感じたことは「選択」と「専門性」という言葉である。

これは、上記4で記載した「クラブの『自立』」「次世代の人材育成」「ボランティアとプロフェッショナル」という観点にも共通する言葉である。ドイツのクラブでは、「自分のクラブがどのようなクラブになりたいのか」という方向性を明確にし（＝選択）、その方向性に向けて必要なスキルやノウハウ（＝専門性）を高める努力がなされている。そのようなクラブが長年続いているクラブであるということだ。

日本の総合型クラブにおいても、今後は「選択」が求められると私は考えている。日本のすべての総合型クラブが同じように発展することは難しいからこそ、それぞれのクラブが自分のクラブを見つめ直し、進むべき方向性を明確にしなければならぬと感じた。

6. 福島県復興へのメッセージ

私のクラブでは、東日本大震災の被災地である福島県葛尾村に対して継続的な支援活動を行っている。被災地で仮設住宅にお住まいの方々には高齢者が多いのだが、支援活動を行う中でこれら高齢者が孤立し、元気がなくなっている様子を目の当たりにしていた。

今回の研修で訪問した「コルシェンプロイヒ・シニア世代スポーツクラブ」では、仮設住宅にお住まいの方々と同年代（50歳代から90歳代まで）の方々と運営されていたが、皆一様に元気に活動されていた。私は通訳の多田氏を介して、シュルツ理事長（女性、70歳代）に対して、葛尾村の現状と支援内容を伝え、仮設住宅にお住まいの高齢者に対してビデオメッセージをお願いしたところ快く引き受けていただいた。「世界中が被災地を忘れていない」という心温まる励ましの言葉をいただいた。

現在ではインターネットの普及により世界中が繋がっている。世界中では様々な事情により不幸な出来事が繰り返されているが、スポーツの力によって、これらの問題を解決してくれるのではないかと思い、私の気持ちは高揚した。

等を楽しみに待ちたいと思う。私自身も少しでも成長できた姿をお見せできるよう頑張りたい。

7. 「チーム」としての日本派遣団

今回の研修では、途中団員たちの意見を述べる（アウトプット）機会が少なく、受動的な研修となりかけていた。そのような思いをベッカー氏に伝えたところ、講師陣と団員たちが相互に対話できるプログラムを取り入れていただいた。団員の中からは、次第に熱い思いが聞こえてくるようになった。やがて、私は派遣団のメンバーリストを視察先クラブの方に手渡す時に、自然と「my team」と言うようになっていた。

8. 最後に

本研修の機会を与えていただいた独立行政法人日本スポーツ振興センター、公益財団法人日本体育協会に対して深く感謝申し上げたい。また、研修期間中の無理なお願いにも快く応じていただいた通訳の多田氏・松尾氏、さらにはドイツでお世話になったクラブ関係者の皆さまにもお礼申し上げます。そして、桑田団長はじめチームの皆さまと素晴らしい時間と経験を共有できたことに感謝したい。私たちそれぞれが経験し感じたことを今後どのように生かしていくのか、それは、団員たちがそれぞれのクラブで活躍されているニュース



岩渕 裕美子

NPO 法人前沢いきいきスポーツクラブ
事務局員

1. ドイツ研修に参加した動機

私は、地元の前沢市でスポーツ少年団の指導者として子どもたちのスポーツ活動に十数年間携わってきた。私が「総合型地域スポーツクラブ(以下、総合型クラブ)」に関わったきっかけは、所属するスポーツ少年団が「NPO 法人前沢いきいきスポーツクラブ」の団体会員として加入することになった際、クラブの事務局長から、「専従スタッフとしてクラブの仕事を手伝って欲しい」と誘われたことであった。クラブの事務所が自宅から近いこと、クラブが私の所属するスポーツ少年団の活動拠点にもなっていたこと、そして、何より自分が大好きなスポーツを仕事にできるということから、平成24年4月よりクラブの事務局員として活動を開始した。

クラブでは「誰でも・いつでも・いつまでも」を合言葉に、地域住民がスポーツを気軽に楽しむことのできる環境づくりを目指している。年間を通じて開催しているスポーツ教室(ソフトテニス、バドミントン、一輪車)をはじめ、ニュースポーツを通じた世代間交流やクラブ間交流等のイベント事業も行っている。

私は、事務局員としてそれら事業に関わる中で、「『地域スポーツクラブ』とは何か?」「クラブで自分が果たすべき役割は何か?」という疑問が膨らんできた。そのような時に、事務局長よりドイツ研修の話をいただいた。ドイツが地域スポーツクラブの先進国であることは以前から知っていたが、実際にドイツのクラブを視察できるチャンスが巡ってくるとは思ってもみなかった。そして、派遣団員に選ばれた時はうれしさとともに驚きもあった。また、所属クラブのためにドイツで地域と密着したクラブづくりについて学ぼうと心に決



めた。

2. 事前研修会で感じた「不安」

しかし、日本で事前研修会(9月2日～3日)に参加した時に、私は「不安」を覚えた。

講師である山本理人氏(日本体育協会地域スポーツクラブ育成専門委員会中央企画班員)からは、ドイツのクラブにおいても時代の変化とともに様々な問題を抱えている現状を教えていただき、また、前年度(平成24年度)の派遣団員である西村貴之氏からは、「ドイツ研修ではクラブ運営に関する『答え』を見つけるというよりも、日本とドイツにおけるクラブ事情の違いを踏まえながら、クラブのあるべき姿を日本とドイツで一緒に探していくものである」と教えていただいた。さらには、全国各地から集まった団員が自分たちのクラブや地域について熱意を持って語っていた様子を見て、自分の考えがあまりにも漠然としていたことに気づき「不安」を覚えた。しかし、今回のチャンスをムダなものにははいけなく思い直し、今回の研修ではすべての人からあらゆることを吸収することに専念しようと誓った。

3. ドイツでの研修

(1) ドイツの街並み

ドイツ滞在中は時差ボケを感じることもなかった。宿舎から講義会場であるライン・ノイス郡庁舎までの道のりは、グレーヴェンブローイヒ駅舎、教会、商店、住宅街とたくさんの景色を堪能できる。車の交通量がそれほど多くない道を、団員たちと所属クラブの活動内容等について話しながら歩く日々は、時間に追われる日本での生活とはかけ離れた、ゆったりとした楽しい時間であった。

(2) スポーツクラブは「自分たち」のもの

ドイツのクラブ事情は、事前研修会の講義で教えていただいた通り、日本の総合型クラブの成り立ちとは全く異なっていた。ドイツでは、「市民にはクラブを創る権利がある」という意識が強くあることから、「クラブは地域住民が創り上げる」という仕組みが自然と生まれてきたようだ。

クラブの運営面においても、現在、ドイツでは日本と同様に少子高齢化に伴うクラブ会員数の減少により厳しい財政状況にあるクラブもある。しかし、各クラブはクラブ存続に向けて、自分たちの力で時代のニーズに合った独自のプログラム提供やクラブ運営体制の改善を図っている。クラブは「自分たち」のものであるという強い自負を感じることができた。

(3) 柔軟な行政のサポート

行政の支援に関しても日本とドイツの違いを感じることができた。日本の場合、市区町村の行政担当者は数年で部署が変わるため、行政担当者の体育・スポーツに関する知識が乏しい場合が多いと感じている。一方でドイツでは州・市・郡ごとの自治権が強く、行政担当者であっても長期間異動することなく働くことが可能であり、ベッカー氏のようにスポーツやクラブのために情熱を注ぐ環境が整っているように感じた。ドイツの郡や市のスポーツ連盟では、時代のニーズにあったプログラムをクラブが展開できるように独自でスポーツ指導者資格の認定や指導者等のスキルアップに向けた講習会を年間を通して実施している。また、

講習会の受講を奨励するための助成制度や有資格者を多数保有しているスポーツクラブへの補助も行っている。より地域性に応じた柔軟なサポートができていているという点で日本とは大きく異なっていると感じた。

4. スポーツの「多様性」を受け入れるスポーツクラブ

今回の研修で特に驚いたことは、講義⑧「スポーツクラブの健康志向コース」を受講した時であった。

これまで私は、「健康」分野に関する事業は行政より提供されるものであるという固定観念があり、ドイツのスポーツクラブが健康志向の会員に対してもプログラムを提供していることに、目からうろこが落ちる思いであった。「健康」と言っても、疾病予防、健康増進、病状改善等様々な目的に応じたプログラムが展開されている。

スポーツとは、「競技性」「遊戯性」「健康志向」等多様な関わり方が可能であり、スポーツをする目的は何でも良いのである。ドイツのクラブでは、地域住民の多様なスポーツニーズに対応するために、学校、病院、企業等と連携して必要なプログラムを展開している。このスポーツの「多様性」の受け皿となり得ていることがドイツのスポーツクラブの強みであるように感じた。

5. 最後に

今回の研修に参加して、研修に参加する動機となった『「地域スポーツクラブ」とは何か?』の疑問に対しては、「クラブにはある一定の『型』があるわけではなく、時代や環境、地域によって変化していくものである」という答えを導くことができた。私は、この研修を通して自分の地域に根付き地域に必要とされる活動をすることが、クラブを存続させるためには不可欠であるということに改めて理解できた。しかし、もう1つの疑問であった「クラブで自分が果たすべき役割とは?」という疑問に対する答えは見つけることができなかった。それは、ドイツのクラブのように自分が置かれている環境や住んでいる地域、そしてクラ

ブを見つめながら探していこうと思う。

「ドイツのクラブは、『人が集まる』→『組織ができる』→『クラブができる』というプロセスで創設される」これは、ベッカー氏の言葉である。この「人が集まる」という言葉が私の頭から離れない。クラブは人と人とのつながりから生まれるものであるということを改めて思い知らされた。今回の研修に参加していなければ、身近にいる地域住民やクラブ会員、クラブスタッフの重要性に気づくことなく、日常を過ごしていたに違いない。今後は、より一層クラブ会員や地域住民の要望に応えるべくアクションを起こしていこうと思う。

最後に、貴重な機会を与えていただいた日本体育協会事務局の方々、桑田団長はじめ団員の皆様に感謝申し上げたい。



佐久間 秀晴

NPO 法人尾花沢総合スポーツクラブ
クラブマネジャー

1. ドイツへのあこがれと新たに抱いた疑問

(1) ドイツへのあこがれ

今回、団員レポートの作成にあたり、私は「なぜ自分が総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）のクラブマネジャーとして活動しているのだろうか」そして「ドイツ研修に参加した動機は何であったのか」という点から振り返ってみたい。

この研修に応募した際、志望動機として「スポーツクラブの先進国であるドイツでは、クラブ運営に関して、より自由な発想に触れられるのではないかと思います。派遣後においては、ドイツ研修で感じ、学んだことを自分の地域でいかに応用できるか考え、今後の10年後、50年後、100年後と発展し続けることができるクラブ運営体制を構築し、地域住民に親しまれるクラブづくりを目指したいと考えています」と記載した。

しかし、このようないわば「理想論」のような志望動機は、事前研修会（9月2日～3日）で講師を務めていただいた山本理人氏（日本体育協会地域スポーツクラブ育成専門委員会中央企画班員）からドイツのスポーツクラブが抱えている問題・課題が日本のそれと同様であるという実情について教えていただいたり、派遣団員が自分の地域やクラブの将来像に対して熱意を持って取り組まれている様子を見ることで、一掃された。

(2) 新たに抱いた疑問

しかし、事前研修会を通じて新たに2つの疑問が湧いてきた。

まず、「本当に『総合型クラブ』が地域に必要なのか」という疑問である。派遣団員の所属クラブに対する情熱と比較すると、「自分は所属クラ



ブに対して本当に情熱を注いでいるとは言えないのではないか」と感じた。それは、私が「地域のためにスポーツを提供する場として、必ず『総合型クラブ』が必要である」と断言できないことに起因しているように思う。私はスポーツ少年団の代表も務めており、総合型クラブと同じく「地域のために」と思って活動している。そこで、「総合型クラブの地域における必要性」について、ドイツ研修を通じて追求したいと考えた。

次に、「ドイツのクラブ運営はどういった観点で行われているのか」という疑問である。私は、クラブマネジャーとしてクラブを運営するにあたり、「ビジネス」という観点を意識して運営している。これは、専ら収益事業のみを展開するという意味ではなく、クラブの収益でスタッフを安定的に雇用できるように事業展開するという意味である。ドイツではどういった観点でクラブ運営がなされているのかということを追うたいと考えた。

2. ドイツを感じて

(1) ドイツへの旅路

期待と不安を胸にドイツへ向かった。機内では

団員同士で総合型クラブに関する会話が繰り返されながら、ヘルシンキを経由してデュッセルドルフに到着。空港ではベッカー氏が出迎えてくださり、バスでグレーヴェンプロイヒへ移動した。道中ベッカー氏から、研修のスケジュールについてドイツ語で説明を受けた。ドイツ語は20数年前、学生時代に講義を受けただけであったため、皆目理解ができず、今思えばもう少し勉強しておけばと後悔した。

(2) 日本とドイツの類似点

研修期間中には、各講師からドイツ社会とスポーツシステム、ライン・ノイス郡におけるクラブ支援の取り組み、クラブマネジメント、社会変化に対応したクラブづくり等について、詳細な講義を受けることができた。

ここでは、日本とドイツには類似点もあることが分かった。例えば、少子高齢化やポスト工業化等の社会環境に関しては日本とドイツに大きな差異がなく、また、ドイツのクラブでも日本と同様に、その大半は会員数300名以下のクラブであり、財政基盤等も常に安定しているとは言えないことが分かった。

(3) 日本とドイツの相違点

しかし、日本とドイツにおいて大きく異なる点が2点あった。それは、「クラブ運営に対する地域住民の関わり方」と「クラブに対する行政支援のあり方」であった。

①クラブ運営に対する関わり方について

クラブ運営においては、多くのボランティアが必要とされるが、そのボランティアがどのようにクラブ運営に関わるかという点については、日本とドイツで異なっていた。日本の場合、例えば、イベントを開催する際、サークルやスポーツ団体のようなある一定の集団単位でボランティアとして参加するケースが多い。一方で、ドイツの場合は、地域住民が個々にボランティアとして参加しているようである。これは、日本のスポーツ振興が行政主導や上部団体が主体となって進められたこと（トップダウン）により、集団を1つの単位とし

て活動する傾向がある一方で、ドイツのスポーツ振興が同じ目的を持った地域住民が自発的に集まりクラブを創設したというプロセス（ボトムアップ）を経ていることに起因しているようだ。

②クラブに対する行政支援のあり方

また、クラブに対する行政の支援体制についても大きな違いを感じた。日本の場合、行政主催のスポーツ教室やイベント等が数多く開催されており、クラブ事業と重複することも少なくない。ドイツでは、行政がスポーツ教室やイベント等を実施することがほとんどなく、スポーツプログラムはクラブが自発的に実施し、行政はそれをアシスト（支援）するという協力体制が構築されている。

さらに、郡スポーツ連盟（日本の市町村体育協会にあたる組織）ではクラブの利益につながる支援体制が整備されていた。スポーツクラブがスポーツ連盟に対し加盟料を支払い、スポーツ連盟は加盟クラブのより良いクラブ運営に資するために、指導者資格の認定やクラブ運営をサポートする講習会等を実施している。そういったクラブの支援体制については、日本はドイツから学ぶ点は多いように感じた。

3. 学校とクラブの連携について

ドイツにおける学校とクラブの連携体制については非常に興味深かった。ドイツにおいては、これまでほとんどの学校が半日制を導入していたことから、午後はクラブでスポーツ活動を行う環境が整備されていたが、現在では、環境の変化に伴い全日制が導入されてきており、子どもたちがクラブでスポーツをする時間が減少している問題がある。しかし、ドイツのクラブでは、その課題に対して学校体育の授業等をクラブがサポートする等積極的に学校との連携を図っているという取り組みがなされており、「ドイツのスポーツは『クラブ』が担う」という根本精神が垣間見えた気がした。

4. クラブ視察にて

クラブ視察ではすべてのクラブから大変なおもてなしをいただいた。「おもてなし」とは、モノやテクニックではなく「心」であるということを変えて実感した。また、それぞれのスポーツクラブではクラブハウス、グラウンド、体育館等クラブ活動に応じた施設を備えており、ドイツにおけるスポーツに対する意識の高さを感じた。

クラブ理事の方々が、所属クラブについて話されている姿を見ると所属クラブへの愛情や愛着を感じずにはいられなかった。そしてスポーツクラブの象徴とも言えるクラブハウスの存在は、クラブ理事や会員にとってなくてはならない「心のよりどころ」であることを感じた。私は、いつか我がクラブにもクラブへの愛着の象徴とも言えるクラブハウスを持つという夢を抱くようになった。

5. 最後に

この研修に参加する前に抱いていた「本当に『総合型クラブ』が地域に必要なのか」という疑問については、クラブがその地域にとって存在価値があるかどうかによって決まると感じた。私の所属するクラブの場合、地域の行政、町体育協会、スポーツ推進委員、スポーツ少年団という関係団体を有機的に結びつける存在として活動できれば、「クラブの存在価値がある＝クラブが地域に必要な存在である」と言えるのではないだろうか。そこには、皆が愛着を持って集えるクラブハウスがあれば良いと思う。

また、「ドイツのクラブ運営はどういった観点で行われているのか」という疑問に対しては、ドイツのクラブでは、ボランティア主体でクラブ運営を行うのか、指導の質やマネジメントの質を高めて、収益を上げることができる専門性の高いクラブ運営を行うのかという2通りの考え方があり、各クラブでどういった方向性を目指すのかを明確に決めている。私のクラブの場合、専門性を高める方向性を目指すべきであると考えているが、その場合は、ドイツのように「一企業体」と

してのクラブ運営が必要であると感じた。そのためには、多くの会員を獲得すること、さらには、会員が欲するサービスの提供、そのための情報収集を怠らない等やるべきことは山ほどある。

最後に、今回の研修を熱意あるリーダーシップで率いてくださった桑田団長をはじめ団員の皆さま、事前研修会でご指導いただいた山本氏、西村氏、そして日本体育協会事務局に対し感謝申し上げます。また、私の質問に対しても的確にアドバイスをいただいたベッカー氏をはじめ講師の皆さま、視察先のクラブ関係者の皆さま、朝から晩まで私たちに付き合っていたいただいた通訳の多田氏・松尾氏にも感謝申し上げます。

私は、今回の研修での学びを無駄にすることなく、これからのクラブ運営に生かせるよう努力していきたい。



伊藤 智毅

特定非営利活動法人塙山コミュニティクラブ
専務理事

1. はじめに

ドイツは、100年以上前から地域に根ざしたスポーツクラブ活動を展開している先進国であると言われている。私の所属する「特定非営利活動法人塙山コミュニティクラブ」も、その名のおりコミュニティ（地域）に根ざした活動を展開していることから、本場のドイツからスポーツクラブの真髄を学んでこようという期待で大きく胸を膨らませて日本を出発した。

ドイツがEU圏の中心的な役割を果たしていることは日頃のニュース等で理解していたが、フィンランドのヘルシンキ国際空港で若干緊張しながら入国審査を受けただけで、ドイツ国内のデュッセルドルフ国際空港では、入国審査やパッケージチェックも何もなく素通りできた。まさに、EUとはそういう所なのだと思いに納得しながらドイツ研修がスタートした。

2. 連邦、州、郡、市町村の行政組織

ドイツは連邦共和制国家であり、人口は約8,000万人、ドイツの州（16州）は固有の主権を有しており、独自の州憲法、州政府が存在しており、文化、教育、福祉行政に関しては、そのほとんどが州政府に委ねられている（その他、州からみて下位の行政区分として、郡〔429郡〕と市町村〔12,000市町村以上〕で構成されている）。

全国にスポーツクラブは91,000以上あり、会員は総人口の約3割、2,300万人以上に達している。また、講義の中の質問で明らかになったが、ほとんどの学校が公立であり教職員の身分は州政府に属し、州政府の内務省か社会省や文部省がス



ポーツを所管している。

私たちの研修は、ドイツ国内の約21%、約500万人のスポーツクラブ会員がいるドイツ国内で1番会員数の多いノルトライン・ヴェストファーレン州のライン・ノイス郡（2町6市）グレーヴェンブローヒ市にある郡庁舎内の会議室で、炭酸入りの水とリンゴジュース、コーヒーが用意されたリラックスできる雰囲気の中で5日間、セミナー形式で行われた。

*数値等は2011年時点のものである。

3. 総合プロデューサーで理論家のアクセル・ベッカー氏

今回の研修全体のプログラム作成、講義のテーマ設定、講師の手配、クラブ訪問時のレクチャー及び答礼夕食会の設定、ライン・ノイス郡庁舎内の講義会場手配、昼食手配等を行うとともに、市内の宿舎（ホテルゾンダーフェルト）に私たちと共に5泊し、全日随行等研修すべてのアレンジを担当したアクセル・ベッカー氏は、今回を含めて計5回本研修事業の受け入れを担当されている熟練の総合プロデューサーであった。

ベッカー氏は、デュッセルドルフ国際空港に着

いてからアウトバーンを走るバス車内で開口1番「ドイツ人は日本人と違って直接的にものを言うので、まずもってお詫びしておきたい。気後れすることなく疑問をぶつけて欲しい。そのことをドイツ人は待っている」と言われたので、私は講義の中で講師陣にあらゆる疑問をぶつけてみた。

ベッカー氏の名刺には、体育教師、ケルンスポーツ大学社会学研究所外部研究員、ライン・ノイス郡スポーツ相談課という3つの肩書きが書いてあり、スポーツクラブに関して理路整然と現状や課題について講義をする理論家であった。2014年3月には、ベッカー氏がライン・ノイス郡副郡長のユルゲン・シュタインメッツ氏、郡スポーツ連盟理事長のトーマス・ラング氏とともに来日されるということで再会が楽しみだ。

4. 少子高齢化社会で課題山積、でもクラブライフを楽しむ

研修は、10月31日のケルン市内見学とスポーツ施設見学を除いては、びっしり講義とクラブ訪問・交流が詰まっており、ドイツのスポーツクラブ文化にどっぷり浸る中身の濃い内容であった。9つの講義や3クラブの訪問・交流のプログラム全体を通して感じたことを挙げると、ドイツも日本と同様に少子高齢化が進行しており、クラブ会員や役員の高齢化と共に、多くのスポーツクラブでは、少子化と共に学校の授業が半日制から全日制へ移行しており、青少年の会員確保に苦慮しているようだ。

また、日本と同様に、ドイツにおいても州や郡、市町村の行財政が厳しくなっていることから公的予算からのスポーツクラブへの財政支援が削減され、これまで利用料が無料であったスポーツ施設が有料化になる等の悩みも抱えている。一方でスポーツクラブに公的施設の管理を委託したり、売却したりする動きもある等従来のスポーツクラブを取り巻く環境が大きく変化してきている現状のようだ。

しかし、クラブ関係者の講義やクラブ訪問等を通して交流した方々からは一様に、課題は山積しているが、スポーツクラブライフを十二分に楽し

んでいる様子が窺い知れ、地域に根ざしたスポーツクラブが築いた100年以上の歴史と伝統をひしひしと感じた。

5. 地域に根ざしたクラブ活動が持続可能である秘訣

ドイツのスポーツクラブが長い歴史と伝統の下に多くの課題も抱えながらも持続できているのは、やはり地域に根ざしているクラブであるという基本概念が国民の間で共有されているからだ実感した。ドイツ人にとってスポーツクラブとは「自分たちの町のクラブ」であり、生活の中に溶け込んでいる。それは水や空気のような存在であり、人々は自分たちの知恵や労力、お金までも出し合ってクラブを維持する。ドイツ人には日常的にクラブライフを楽しむDNAが備わっているようだ。クラブのために自分ができることを第一義的に考える発想がこの国のスポーツクラブを守り育ててきたのだと思う。

しかし、クラブ先進国のドイツでも、日本よりは桁違いに多いとは言え、クラブ会員は国民、市民の約3割に留まっていることや余暇時間の活用が多様化してきていること、少子高齢化の進行、ボランティア精神にも一部翳りが見えはじめていること、地域社会の変動に伴う人間同士の関係性の変化等の社会問題を越えながら、どのようにクラブ活動を持続可能な形で展開するかが大きな課題となっている。

日本のクラブが持続可能な形で活動を展開できるかどうか、いかに地域や町に根ざしているか、住民の社会的ニーズにどのように応えられるかが重要であり、スポーツ活動や限定的な種目に特化したクラブは住民から十分な支持は得られないかも知れない。

そのためにも地域コミュニティに根ざしたクラブが健康、福祉、スポーツ、芸術等住民生活の全領域を包含した活動を展開することが求められているのではないだろうか。

最後に、今回の研修を献身的にプロデュースしていただいたベッカー氏をはじめ講師の方々、通訳の多田氏・松尾氏、桑田団長、団員の皆さん、日本体育協会事務局の皆さん、そして研修でお世話になったすべての方々に深謝して団員レポートとしたい。



蛭沼 隆雄

特定非営利活動法人あいおいスポーツクラブ
専務理事

1. 参加した動機について

総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）の存在を知ったのは平成14（2002）年である。それまで地域においてサッカーのスポーツ少年団で活動していた私が、桐生市より総合型クラブ設立に向けた検討委員会の委員就任の要請を受けた時である。それから約10年の活動を経て、今回のドイツ研修につながった。ドイツへ派遣される前、ドイツは私にとっては夢のような存在であり、雲の上の存在であった。その憧れのドイツでの研修を通じて、何か自分の地域のために役立てたいと思い参加した。

2. 講義・クラブ視察について

研修期間中は、毎日宿舎から講義会場であるライン・ノイス郡庁舎までの徒歩20分間を中世の街並みを残す風景を眺めながら歩いた。

毎朝、宿舎を出発する前には、今回の研修プログラムをコーディネートしていただいたアクセル・ベッカー氏（ライン・ノイス郡スポーツ相談課長）からの挨拶で始まる。講義は、郡庁舎の2階会議室で行われた。

講義初日（10月28日）にはライン・ノイス郡副郡長ユルゲン・シュタインメッツ氏、在デュッセルドルフ日本総領事館首席領事相馬安行氏、ライン・ノイス郡スポーツ連盟理事長トーマス・ラング氏を交えて表敬訪問を行った。表敬訪問と言っても日本のような堅苦しさがなく実に気軽な雰囲気であったことに驚いた。

その後、ケルン体育大学特任教授であるフォルカー・リットナー氏の「社会の発展とスポーツ」という講義から研修が開始された。講義を受ける



につれて、ドイツのクラブが抱えている課題が浮かび上がってきた。それは、現在日本が抱えている課題と同じものであるということにすぐに気が付いた。ドイツが抱えている課題とは、ポスト工業化社会における人と人とのつながりや地域コミュニティの希薄化や少子高齢化である。また、移民問題や教育制度の改正等の問題も表面化している。しかし、そのような状況の中においてもドイツではクラブが地域コミュニティの重要な役割として機能しているようである。

毎日、午前9時から午後5時頃まで講義を行い、夕方からはクラブ視察という日々であった。クラブ視察では出迎えてくださる方々の笑顔が私を癒してくれた。とにかくみんな陽気である。ドイツ人は、威厳があり近寄りがたいというイメージを持っていたので、全く違ったことに気付かされた。

スポーツを「楽しむ」ということを大切にしているクラブの方々の様子を見て、スポーツの本質を見たような気がした。100年以上も続いているサッカークラブで活躍する青少年、彼らを温かい眼差しでクラブハウスから眺める大人たち、クラブで人生を謳歌しているシニア世代、ドイツ語は分からないがその様子を見れば、彼らがクラブに

誇りを持っていること、クラブに情熱を注いでいることが自然と伝わってきた。

3. ドイツ研修でどのように感じ、何を学んだか

今回の研修を通じて、自分自身にとって目に見えた劇的な変化があったわけではないが、多くの「気付き」を得ることができた。

「スポーツは孤立するものではなく、生活の一部でなければならない」という言葉は、私たちがドイツに到着した日にベッカー氏が、デュッセルドルフ国際空港から宿舎まで移動するバスの車内で語った言葉である。研修を進める中で、この言葉の真意が分かってきたように思う。ドイツにおいて、クラブは地域住民が自発的に集まって創設された組織であるので、クラブがスポーツを提供する対象は地域住民である。クラブが地域住民のニーズに応じたプログラムを提供すれば、地域住民はクラブをより良く運営するための努力を欠かさない。この相互に支え合う仕組みがあってスポーツは地域社会の一部として存在しているのである。

そこで、これまで自分が行ってきたクラブ運営を振り返ると、「地域住民のために」という視点が弱かったように感じている。スポーツ教室やスポーツイベントを実施し、スポーツをする環境を整えてはいたが、それが本当に地域住民のニーズに合ったものであったのかという検証が乏しかったように思う。むしろ「自分は一生懸命頑張っているのに、どうして分かってもらえないのだろう」という気持ちさえ抱いていた。しかし、今回のドイツ研修を通じて、より「地域のために」という視点を強く持つべきであると感じており、その意識でクラブを運営することが、本当の意味での「クラブマネジメント」なのだろうと思う。

4. ドイツのクラブ文化を日本の総合型クラブに応用できるか

ドイツのクラブ文化を日本の総合型クラブにそ

のまま導入することは難しいと思った。それは、「日本人は婉曲的な表現や、言葉ではあえて伝えない表現を好むが、ドイツ人はより直接的な表現を好む」とベッカー氏が言われたように、両国には文化的な相違があるからだ。しかし、日本においてもドイツのクラブ文化で応用できる部分はある。それは、「スポーツを楽しむ」という考え方である。本来、スポーツは自発的に運動する「楽しみ」を基調とする世界共通の文化であるが、日本人と比較してドイツ人はより「楽しむ」という要素を大切にしているように感じた。日本においても、住む人や考え方が違ってもスポーツを「楽しむ」という考え方を総合型クラブから発信できれば、より多くの地域住民にスポーツを広げることができるのではないかと感じている。

また、今後はより地域と密着するために、次世代の人材を育てる、発掘する、人と人をつなげるということ意識した研修にも力を入れていきたい。「スポーツは孤立するものではなく、生活の一部でなければならない」という言葉を胸に秘めて、これからも活動していきたいと考えている。



入江 能子

クラブ123荻窪
クラブマネジャー

1. 私とドイツ

私は体育指導委員（現：スポーツ推進委員）として活動する中で「総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）」の存在を知り、総合型クラブによってスポーツを通じた地域の仲間づくり、健康づくり、街づくりに貢献できるということは素晴らしいことだと思った。そこで、総合型クラブについて勉強すると、日本の総合型クラブはドイツのクラブをモデルとしていることが分かった。その後、「ドイツのようなクラブを作りたい」という大きな理想を抱いたことがきっかけとなり、地域の仲間と「クラブ123荻窪」を設立した。

クラブマネジャーとして悪戦苦闘しながらクラブを運営する傍ら、総合型クラブについて勉強する中で100年以上の歴史を持つドイツのクラブをいつか自分の目で見てみたいと思うようになった。この長年の夢を今回の研修が叶えてくれることになった。

派遣が決定した時には、私のクラブは会員数120名程度の小さなクラブであり、全国のクラブを代表して研修を受けることに気が引ける思いがしたのと同時にこの上なく光栄であるとも思った。

2. ドイツのクラブに対するイメージ

私が思い描いていたドイツのクラブのイメージは次のようであった。

- 100年以上の歴史がある
- クラブは多くの会員を抱え、多世代が交流している
- 天然芝の広いサッカーグラウンドを所有している



- トップアスリートから小さな子どもたちまで同じグラウンドでスポーツを楽しんでいる
- 地域に開かれたクラブハウスを持っている
- クラブハウスで地域住民がビールを飲みながら語り合っている

ところが事前研修会（9月2日～3日）では、意外にもドイツのクラブはその半数以上が会員数300名以下のクラブであり、社会環境の変化に応じて沢山の課題を抱えているということが分かった。ドイツのクラブも、私たちのクラブと同じような課題を抱えていることが分かると、なおさら親近感が湧きドイツ訪問が楽しみとなった。

また、杉並区役所に派遣決定報告と挨拶に行くと、区役所の方にはことのほか喜んでいただき、餞別として2020年東京オリンピック・パラリンピック関連グッズとともに、ドイツで聞いてきて欲しい事項を宿題としていただいた。

3. ドイツのスポーツシステム

さて、10月27日に憧れていたドイツに到着し、浮かれていた気分も東の間、翌28日から早速研修の日々が始まった。講義の中で特に興味深かつ

たことは、アクセル・ベッカー氏（ライン・ノイス郡スポーツ相談課長）によるドイツのスポーツシステムに関する講義であった。

ドイツでは、「クラブ」と「スポーツ連盟」で構成されるピラミッド型の構造がある。個々のクラブは市や郡のスポーツ連盟に加盟し、クラブはスポーツ連盟に加盟料を払うことにより、地域のグラウンド等を優先的に利用できたり、スポーツ連盟が提供する指導者養成の講習会等を受講できたり、スポーツ連盟の職員からクラブ運営に対するアドバイスを受けることができる。

スポーツ連盟のクラブ担当事務局には、体育大学等で専門的に学んできた職員が、長期的にクラブ支援に関わっており、クラブ側も気軽に相談・要望ができる仕組みとなっている。クラブが抱える課題は、ヒト・モノ・カネ等多岐にわたるが、スポーツ連盟の職員はより良いクラブ運営のための知識やノウハウを持っているようだ。

また、市や郡のスポーツ連盟で対応が難しい事柄は上部団体である州のスポーツ連盟が、行政や政治家に対してクラブの利益につながる活動（ロビー活動等）を行う仕組みである（個々のクラブは市や郡のスポーツ連盟に加盟すると州のスポーツ連盟にも自動的に加盟する）。私は実に素晴らしいシステムができ上がっていると感じた。

ドイツのクラブは日本のクラブと同様にほとんどがボランティアによって支えられている。ドイツのようなシステム（クラブ運営に対して専門的な指導・助言を行う職員の存在、個々のクラブの利益を代表して上部団体に伝える仕組み、指導者資格の認定制度等）が日本にもあれば、クラブ運営もよりスムーズに進むのではないかと思われる。繰り返すようだが、実に良い関係ができていると思う。

4. ドイツのクラブライフ

今回の研修では3クラブの視察をさせていただいた。いずれのクラブにおいても理事長や理事、スタッフ、さらにはクラブ会員の子どもからお年寄りまで生き生きとクラブライフを送っている様子がうかがえた。特に、コルシェンブロイヒ・シ

ニア世代スポーツクラブの会員たちは、50歳代以上の会員が多く、家族のように結びついてクラブライフを過ごしている様子をうかがうことができた。

クラブの方々からは、ドイツにおいても日本と同じような課題を抱えているとうかがった。

- ・会員や参加者の高齢化
- ・クラブの財政難
- ・ボランティアの減少
- ・子どものクラブ離れ

そういった状況を抱えながらも、スポーツ連盟や行政と協力しながら将来を見据えたクラブ運営を行っているドイツのクラブは「すごい」と思った。彼らの満ち足りた笑顔を見るとクラブライフの楽しさが良く伝わってくる。私が「クラブではこうありたい」という理想がドイツのクラブにはあった。

5. 優秀なコーディネーターであるベッカー氏

ベッカー氏は、最初にお会いした際の挨拶で「ドイツ人は時間に正確です」と語っており、とても真面目で冷静沈着な方であるという印象を抱いた。ところが、数日行動を共にする内にベッカー氏の「おもてなし」の心を痛感させられることが多々あった。「日本人にとってどのような研修であればより受講しやすいのか、理解が促進されやすいのか、意見交換がしやすいのか」ということをいつも考えているようだった。

また、夕食のメニューや私たちの服装にまで気を使ってくださり、講義の中ではジョークも交えながら話をするベッカー氏の「おもてなし」にとても感動した。ついつい忙しい日々のクラブ運営に追われる自分の姿を思うと、クラブマネジャーとして大切な部分を忘れていたように思う。

私が今回の研修で一番学びたかったことは「マネジメント」であった。ベッカー氏こそ、マネジメント、コーディネートのプロフェッショナルなのだと言動を見てつくづく思った。すべてが勉強になる内容ばかりだったが、特にマネジメントの部分は、講義と共にベッカー氏を見ることにより

大変勉強になった。

6. 終わりに

短期間ではあったが、憧れであったドイツのクラブを訪問し学んだことは私の財産になった。所属クラブである「クラブ123 荻窪」と共有できる課題もあれば、目から鱗が落ちるような取り組みもたくさんあった。

私は「自分がクラブマネジャーとしてクラブに果たすことができること」そして「クラブ123 荻窪の今後の展開」についての方向性が見えたような気がする。これからは地域に戻りドイツで見て、感じたことを多くの方へ伝え、今後の活動方針をクラブ役員、会員、行政と確認しながら実践していきたい。

また、全国から集まった団員たちと共に語りあい、情報交換できたことも大変勉強になった。ともにクラブ運営に関わり熱い思いで参加された派遣団の皆さんは素晴らしい方ばかりであり、今後も情報共有していけたらとてもうれしく思う。チューズ！！

最後に、講義いただいた講師の方々、コーディネーターのベッカー氏、通訳の多田氏・松尾氏、そして日本体育協会事務局に対して心からお礼申し上げます。



野田 ひろみ

城下町スポーツクラブ
クラブマネジャー

1. ドイツ研修に参加した動機

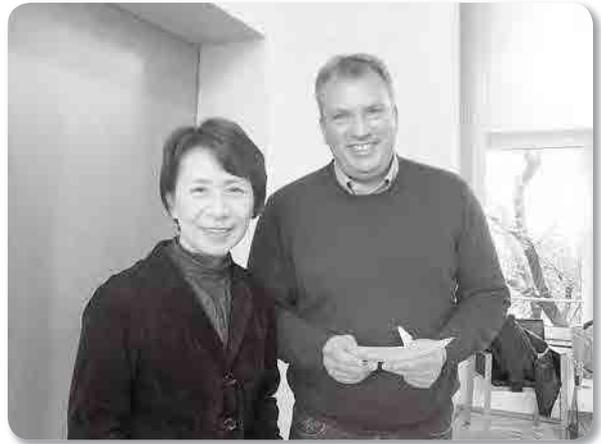
神奈川県小田原市のスポーツ指導者協議会が中心となり設立した我がクラブは、初心者を対象として多種目のスポーツ教室を展開することにより、スポーツ指導者の活躍の場を創造するとともに、地域に貢献できるクラブづくりを目指してきた。近年になり行政の支援を受けながら、行政と共にクラブが地域に密着できるよう取り組んでいるが、未だ地域との連携が不十分であると感じており、日々試行錯誤を重ねている状態である。

地域に対して「総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）」の普及・啓発活動を行う中で、地域スポーツクラブ先進国であるドイツにおける「地域」「学校」「クラブ」の連携体制、クラブ発展の歴史、クラブ運営のあり方等について関心を持つようになり、これらの事柄をスポーツクラブの本場の雰囲気の中で感じたいと思いこの研修に参加した。

2. ドイツ派遣が決定

ドイツ派遣が決定した旨をクラブスタッフに報告した際、皆一様に喜んでくれたが、私自身としては「クラブのために学ぶべきか」「自分のスキルアップのために学ぶべきか」と悩んでしまった。しかし、「自分のために楽しんで行ってきなさい」と皆から助言され、肩からスーッと力が抜け気持ちになった。私は本研修のテーマを「クラブを通じて地域を元気にするにはどのように取り組むべきか」とした。

事前研修会（9月2日～3日）に参加した頃は、折しも2020年オリンピック・パラリンピックの東京招致に向け国内が盛り上がっている時であった。派遣団員13名と団長が初めて顔を合わせな



がら、昨年度（平成24年度）の派遣団員からドイツの現状や研修中の過ごし方等の講義を受け、気分は既にドイツに行っていた。

3. ドイツ滞在中での出来事

ドイツ滞在中10講義を受講し、3クラブの視察を行った。約150年前から続くドイツのクラブの歴史を肌で感じながら、多くのことを勉強することができた。研修を通じて感じたことを以下に記載する。

（1）少子化と学校制度改革（半日制から全日制への移行）に伴う問題

ドイツでは学校とクラブが共有している「子どもたちにより多くの運動機会を提供する」という強い願いから、学校とクラブが上手く連携していると言える。学校制度が半日制から全日制へと移行する中で、子どもたちのクラブ活動への参加が減少している。そのような状況の中で、クラブは行政とともに会員確保のためのビジョンを明確に打ち出す等の対応をしている。

(2) 若年層のクラブ離れ

若年層のクラブ離れについては、事前研修会においてその現状を聞いていたが、原因は個人主義的な考え方が若年層に広まっているからであるようだ。組織に属することを嫌う傾向のある若年層は、クラブに所属することも敬遠するそうである。しかし、ドイツではスポーツ施設をクラブが優先的に使用できる仕組みが確立されていることから、若年層は施設を使用しない形で行う運動(ジョギング等)を行うようだ。

(3) 高齢化に向けたクラブの取り組み

「コンシェンプロイヒ・シニア世代スポーツクラブ」を視察した際、クラブスタッフもすべてシニア世代(若い方でも50歳代)であることに驚いた。自分の健康・病気予防に関心を持ちながら、高齢者同士で楽しむことができるフィットネスプログラムや小旅行会を自分たちで企画・運営している。私たちがクラブを訪問した際には、美味しいケーキをいただき、ケーゲル(ドイツポーリング)を楽しんだ。

私もそろそろシニアの仲間入りである。今後、高齢化が進んでいく日本において、このクラブの取り組みは大変参考になると感じた。日本のクラブにおいても、将来的には若い時に仕事や子育てを理由にクラブ活動から離れても、シニア世代になってからまた戻ってこられるようなクラブが増えていけば良いのではと感じた。

4. まとめ

今回の研修を通じて、特に印象に残った言葉は「ドイツクラブの原点は、その地域に移り住んだ人たち同士の交流の場を作ることから始まった」「クラブハウスで子どもを育てる」という言葉であった。こういった言葉が自然と出てくる環境づくりこそ、私が今回テーマとして掲げた「クラブを通じて地域を元気にするにはどのように取り組むべきか」の答えであると感じている。今回の実り多い体験を糧として今後のクラブ運営に力を注いでいきたいと思う。

5. 感謝

今回、研修期間中ご一緒させていただいた桑田団長はじめ団員の皆さんとは素晴らしい日々を過ごすことができた。特に、私を含めて5名の女性団員が男性団員に負けない元気で研修を盛り上げたと自負している。

また、アクセル・ベッカー氏には、研修をコーディネートしていただくだけでなく、短い期間にもかかわらず私たちの顔と名前を憶えていただいたことに深く感謝申し上げたい。研修の最後には1人ひとりに研修の修了証を手渡してくださり、とても感動的であった。そして、私たちをサポートしていただいた通訳の多田氏・松尾氏にも感謝申し上げたい。

最後に、本研修の参加に向けてご協力、応援いただいた所属クラブのスタッフや家族にも深く感謝申し上げたい。



藤牧 敏子

NPO 法人
長野スポーツコミュニティクラブ東北
事務局主任

1. はじめに

今から12年程前、私が所属するクラブのスタッフが日本体育協会の事業で3か月間、ドイツ・シュトゥットガルトのクラブで研修を行った。当時その体験談を聞いたときは、「ドイツのクラブ=すごい、素晴らしい、うらやましい」といった感想を抱いたように思う。その頃、我がクラブは設立からまだ日も浅く、計画した活動を順調にこなすのが精いっぱいであった。周辺の地域を見ても総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）自体、県内にほんの一握りしかなく、ましてや長野市の周辺では自分のクラブだけという状況であった。他団体や行政に対して要望等を行うときには、まず「総合型クラブ」という仕組みについての説明に時間を割かねばならず、歯がゆい思いをしていた時期でもあった。

今回、この研修への応募に際し志望理由を書くにあたり、自分たちのこれまでの活動を振り返ってみると、ドイツであっても政治や経済等社会環境の大きな変化を経験しているはずであり、問題・課題はたくさんあるはずである。それら問題・課題をドイツのクラブはどのように対応しようとしているのかについて知ろうと思った。もっとも、ドイツが抱える問題・課題については、早くも事前研修会（9月2日～3日）でのドイツ及びスポーツクラブに関する講義の中で知ることになったのだが。

2. そしてドイツへ

台風一過の晴天の中、成田を飛び立ちヘルシンキ経由でドイツへ。日本から12時間余りのフライトを経て着いたのはグレーヴェンブロイヒ。大



都市であるデュッセルドルフやケルンへどちらも車で30分程で行けるベッドタウンである。石畳の歩道や高い尖塔を持った教会等の古い建築物と近代的な街並みが混じり合う落ち着いた雰囲気の中で研修期間を過ごすことになった。この町に着いてから気づいたのだが、平日の午後3時頃から商店街には多くの人が集まっている。買い物をする人はもちろん、道端で知人とおしゃべりしている人、しつけの行き届いた犬を連れて散歩している人も多数いる。そして街角のカフェでは老若男女でほぼ満席。日本の同規模の町の商店街と比較すると大きく雰囲気が異なる。平日の昼間から余暇を楽しむという土壌があるからこそ、ドイツのクラブ文化が発展してきたのだと感じた。

3. クラブ訪問にて

ドイツへ行ったらやはり実際のクラブハウスを見たいと思った。「ビールサーバーのあるクラブハウスってどんな感じだろう」と期待を胸に、今回3クラブを訪問させていただいた。3クラブとも歴史のあるクラブで自前のクラブハウスを所有している。クラブハウスにはバーカウンターがあり、そこには、「ありました！ビールサーバー」。

「TUS グレーヴェンブロイヒ」にはカウンターに専任スタッフまでいる。ちなみにビールはクラブと提携しているビール会社が卸しているようだ。会員もスタッフもビールを片手にわいわいやっている中から、色々なアイデアが生まれクラブの原動力となっていく、そんな風景に思いを馳せた。そしてクラブハウスのバルコニーからはサッカーのゲームをしている子どもたちを見ることができ、ナイター照明が完備された芝のフィールド。サッカーが一番人気の競技だそうで、練習環境も整っていてとてもうらやましい。

その他「コルシェンブロイヒ・シニア世代スポーツクラブ」では、第2の人生をクラブでいきいきと活躍されている理事の方々と夕食懇親会。「ケーゲル（ドイツポーリング）」で盛り上がり、「オルケン体操クラブ」ではクラブ会員のブラスバンド演奏で歓待してくれた。ドイツ語はできなかったが片言の英語と身振り手振り、最後はダンスパフォーマンスでコミュニケーションをとった。

4. 講義から

ドイツ研修を通じて、ドイツのクラブは次のような問題・課題を抱えていることが分かった。

- 少子高齢化
- 学校の全日制への移行
- ボランティアの不足
- 若者のクラブ離れ
- 移民の問題
- 財政難（行政からの補助金・助成金の削減等）

これらの問題・課題に対しては、大学教授、スポーツ行政担当者、現場のクラブ代表者等様々な立場から行われた講義においても、幾度となく取り上げられ、その一部は日本のクラブが抱えている問題・課題にも共通するものであった。さらに言えば、学校の全日制については、日本の方が先進的であると考えられているようで、日本のクラブの取り組みについてドイツ側から質問されるような場面もあった。

上記の問題・課題の解決に向けてドイツのクラブが行う取り組みについて勉強することを通じて

感じたことは、これらの問題・課題に対する包括的な解答はないということだ。それは、100クラブあれば100通りの取り組み方法があるのかもしれないということだ。しかし、ここで大切なことはクラブ単独の取り組みでは解決できないことから、連携するパートナーを見つけアクションを起こすことであった。クラブの現状、成果、展望等について公開し、パートナーとの信頼関係を築き、さらに情報を発信することで多くの共感を得ていくことが大切である。

また、ドイツのクラブでは、クラブ会員やボランティアの減少という問題・課題を抱えつつも、「クラブ会員はクラブ運営に参画する」という意識が根底にあると感じた。日本の場合、これまで「スポーツはタダである」という意識が根付いており、例えば受益者負担という考え方も、「会費さえ払えばクラブ運営に参画しなくて良い。会費を払う＝お客様である」という考え方となっている部分がある。これは単に会員側が一方的に考えているだけではなくクラブ運営者側もそのような考え方を少なからず持っているのではないだろうか。そのような考え方では、ボランティアやスタッフを発掘することは難しい。今後は、クラブ会員だけでなくクラブ運営者側も含めた意識改革の必要性を感じる事ができた。

5. 最後に

今回の研修を通じて、ドイツのスポーツシステムやクラブの現状等について非常に理解を深めることができた。また、改めてスポーツは言語や風土を超えた「コミュニケーションツール」であることを認識した。そして、ドイツのクラブに携わる人々が持つ情熱や自分のクラブを愛し、自慢し、楽しむ姿を間近に見て、実際に行ってみないと分からない雰囲気があると感じた。この体験を自分だけのものとせず、多くの方々と共有していくことが派遣された私たちの使命であると考えている。

今回の研修は日常を離れ、ドイツという地から自分たちのクラブを見つめることで、日常ばかり

に集中しがちな視野を広くする貴重な機会となった。また、寝食を共にすることで、団員同士で忌憚のない情報交換や意見交換ができたことも大きな収穫であり、この縁は大切にしていきたい。

今回の研修への参加にあたり、ご尽力いただいた日本体育協会事務局、桑田団長には大変お世話になり、心から感謝申し上げたい。また、ベッカー氏をはじめ通訳の多田氏・松尾氏、講師の方々等ドイツ滞在中にお世話になったすべての皆様に感謝申し上げたい。また、北は北海道から南は九州まで、全国津々浦々から集合した団員の皆様にも感謝申し上げたい。立場は違えども皆クラブに携わる仲間であるので、これからも共に手を取り合いクラブの未来を創っていききたいと思う。



本田 高一

アプロス菊川
運営委員長

1. ドイツ研修に向けて

私が居住する菊川市で総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）を立ち上げるという話になり、その準備にあたったのが今から5年程前である。その時にドイツ研修の存在を知った。その後、私は「アプロス菊川」の立ち上げ発起人として活動するとともに、県、地域ブロック、全国で開催される総合型クラブに関する会議等に出席するようになった。

やがて、クラブ発展のため活動する中で次第に地域スポーツクラブの先進国であるドイツに行き、勉強したいという気持ちが大きく膨らみ始め、それが「夢」となった。そして今年（平成25年）の5月、静岡県体育協会からドイツ研修参加者の募集案内を受け参加を決めた。

2. 私が抱いた3つの疑問

今回のドイツ研修にあたり、特に私がドイツで見てきたいと思ったことは以下の3点であった。

1つ目は「行政がクラブをどのようにサポートしているか」についてである。菊川市では行政が市民サービスとして各種スポーツ教室を実施している。当該教室はクラブが実施するスポーツ教室よりも安い参加料で実施されており、かつ指導者に対してクラブが支払う謝金よりも高額な謝金が支払われるため、それがクラブ運営の障害の一つとなっている。ドイツでは行政とクラブがどのような形で協力し合っているのかについて学びたいと考えた。

2つ目は「クラブの活動拠点施設の確保」についてである。菊川市では市体育協会が平成25年度からNPO法人格を取得し、市内3体育館の指



定管理者として運営している。クラブはその傘下に入り、体育協会の業務を補佐することで、体育館の一部を事務所として使用させていただいている。また、現在クラブ会員の多くが陸上競技教室に参加する小中学生であり、その活動場所は市内にある私立高校のグラウンドをナイターの電気料金を含め、無料でお借りしている。残念ながら市にはナイター設備の整った陸上競技教室が行える施設がない。ドイツでは活動拠点施設がどのように確保されているのかについて学びたいと考えた。

3つ目は「クラブ会員がどのように確保されているか」についてである。現在、クラブでは、市民への広報活動が充分に行われていないことも理由に挙げられるが、高齢者や働き盛りの市民を対象にしたスポーツ教室では、「会員になるメリットが感じられない」という理由で会員数が伸び悩んでいる。そこで、ドイツのクラブではクラブ会員をどのように確保しているのかについて学びたいと考えた。

以上の3点の疑問の解決に向けて、今回の研修を通じて何かヒントを見つけたいと考えていた。

3. ドイツで学び、印象に残ったこと

私は、前記3つの疑問を持ってドイツ研修に臨んだ。しかし、約1週間の研修で学んだことは山のようにあるため、ここでは、講師の方々から教えていただいた内容で、特に私自身が今後のクラブ運営において意識して取り組みたいと思ったことや強く記憶に残ったことを中心にまとめたい。そして、その中に私が解決したい3つの疑問を解決するためのヒントを見つけることができた。

(1) ドイツにおけるスポーツ関連組織について

ドイツの場合、ほとんどのクラブは市や郡のスポーツ連盟に加入しておりその傘下に属する。その上には州のスポーツ連盟があり、市や郡のスポーツ連盟に加入していれば自動的に州のスポーツ連盟に加入する。そして、スポーツ連盟に対応する行政（市と市スポーツ連盟、郡と郡スポーツ連盟、州と州スポーツ連盟）がそれぞれサポートを行っている。したがって、クラブは地域住民にスポーツプログラムを提供し、スポーツ連盟はクラブの運営支援を行い、行政はスポーツ連盟を財政的に支援している仕組みであり、行政、スポーツ連盟、クラブがそれぞれの役割を分担し、協力し合ってスポーツ振興に取り組んでいた。

(2) 行政が考えるクラブへのサポート

アクセル・ベッカー氏（ライン・ノイス郡スポーツ相談課長）からは、クラブに対する行政の考えについて教えていただいた。ベッカー氏が常日頃考えていることは以下の2点である。

- ①クラブは、子どもたちのスポーツ活動や地域の問題に対して何をすることができるか
- ②クラブ運営のためにはボランティアが重要であり、行政はボランティアをどれだけサポートできるか

以上のことからドイツでは、行政がクラブを活用し子どもたちのスポーツ活動や地域の問題に対してサポートしていることが分かった。ドイツの行政では、日本のように行政側が直接スポーツ教

室やスポーツイベントを実施することはほとんどない。行政とクラブの役割がしっかり分担され、お互いの協力体制ができている。

(3) クラブと企業との連携

アクセル・ヴェルツ氏（TSV バイヤードルマーゲン）からは、企業に対してクラブが行う取り組みについて学んだ。その内容はクラブ運営の1つの手段として、クラブが企業で働く従業員の健康をサポートするプログラムを展開する取り組みである。企業では従業員の福利厚生を推進するために、従業員がどのような健康上の問題があるかを把握する必要がある。そのために、クラブは健康増進に係る専門的な知識とスポーツ医学を用いて、従業員の健康問題を解決するための手段を提案、プログラム化し従業員の健康増進に向けた活動を展開していく。クラブ側からすればクラブの持っているノウハウを活用し、企業の取り組みをサポートすることで、企業側からその対価だけでなく、寄付金等を獲得できる。

(4) 活動拠点施設の確保とロビー活動

ヴィンフリート・シュミット氏（TV ヤン・カペレン体操クラブ会長）からは、クラブの財政計画と政治家へのロビー活動の必要性を学んだ。TV ヤン・カペレン体操クラブは、それまで市が行っていたプール施設の管理を市が運営できなくなり閉鎖する計画があったため、クラブがそのプールを引き取り、市の委託で管理することになった。市に1つしかないプールを管理することで、市民に対しクラブの必要性をPRできたそうだ。さらにシュミット氏は、市から施設や助成金等の支援が受けられるよう、年間300時間以上のロビー活動を行っている。やはり、市の予算や施設に関わることは、政治家へのロビー活動が必要であることを学んだ。

上記(1)～(4)から、当初私が抱いていた3つの疑問に対するヒントを得た。

「行政がクラブをどのようにサポートしているか」については、上記(2)記載の通り、ドイツでは行政とクラブの役割分担を明確にしていたこ

とが分かった。

「クラブの活動拠点施設の確保」については、上記（４）記載の通り、ドイツのクラブは行政や政治家に対するロビー活動を行うことによって、クラブがより活動しやすいように取り組んでいることが分かった。

「クラブ会員がどのように確保されているか」については、上記（３）記載の通り、ドイツのクラブでは、クラブ会員数が減少している中でも企業等へ積極的にアプローチしながらクラブ参加者を増やしている取り組みがなされていることが分かった。

4. 研修に参加しての感想

（１）ドイツのクラブ事情

ドイツは100年以上前からスポーツを通じて人と人との絆を深めてきた。そのスポーツは日本のように、行政主導で進められてきたものではなく、住民主導でスポーツクラブを立ち上げ、仲間と共に地域住民の力で進められてきた。しかし現在、ドイツでは少子高齢化に伴うクラブ会員の減少により、クラブの財政状況が苦しくなっている。そして、社会の発展に伴い、個人主義的な考え方をする人々が増え、小さなクラブではボランティアで運営に携わる人の世代交代がうまくゆかず、理事長や事務局長の高齢化が進み、運営危機に陥っている。しかし、それら問題に対し国や行政は、国民が自ら作り上げてきたクラブを、国民のために生かし存続させようとしている。そのため、今までの古い考えから脱却し、新しいクラブの形を作ろうと、国、州、郡、市がそれぞれの立場でサポートしている様子が見えてきた。

（２）日本のクラブがドイツのクラブから学ぶべきこと

日本では、まだまだスポーツは行政主導で行われる側面があり、スポーツは行政が市民サービスとして提供するものだと考える人々が多い。人々はスポーツに対して受け身的で一部の市民のためだけのスポーツになっている。私自身が日々のクラブ活動で感じることは、行政側も従来の形から

脱却できず、総合型クラブをどのようにサポートすれば良いのか模索中であると考えられる。

社会の発展や少子高齢化が引き起こす社会問題に対し、今までのように一部のスポーツ愛好者だけが大切な市の予算を使いスポーツを楽しむのではなく、スポーツを媒体にし、多くの市民が健康で豊かな暮らしができるよう、まず、市民の意識改革から始めなければならないと学んだ。ドイツで学んできたことを活かし、クラブ経営を活性化させることと並行しながら、市民に対してスポーツが私たちの暮らしの中で重要であることを伝えていきたいと思う。そのために、ロビー活動を積極的にを行い、行政に働きかけ、協力体制を構築していきたいと考えている。



古田 政一

NPO 法人ウィル大口スポーツクラブ
事務局長

1. はじめに

私が所属する「NPO 法人ウィル大口スポーツクラブ」は2002（平成14）年の活動開始から11年が経過した。発足当時を振り返ると子どもたちを取り巻くスポーツ環境は、全くと言っていいほど整備されておらず、スポーツをしたい子どもは近隣市町に出向いて行っていることが多い状況だった。現在では、子どもからお年寄りまでが関わるの持てるスポーツ活動や文化活動を行っている。少しずつではあるが地域でも認知され、クラブの運営も形になり、クラブの理念である「からだの健康、こころの健康、地域の健康を創造し、健康なまちづくりに寄与する」ことが実践できているという少なからずの達成感があった。

しかし、2010（平成22）年に日本体育協会公認クラブマネジャー養成講習会に参加した際、全国のクラブの方々と接する中で自分のクラブがとても閉鎖的（情報量の少ない）な環境で活動していることに気付いた。

また、2013（平成25）年5月に開催された全国スポーツクラブ会議に参加した際に、テーマが「100年続くクラブを目指そう！～協働・融合のまちづくり～」であった。これまで「100年」というスパンでクラブのことを考えたことがなく、壮大過ぎるテーマであるとも感じたが、今後のクラブ運営を考える良い目標となった。そして、「設立して10年程度のクラブを100年続くクラブにするには」と考えたもののなかなか具体的なイメージが湧いて来ず、「実際に100年以上続いているクラブとはどういったクラブなのだろう」と思ったことがきっかけで、今回のドイツ研修に参加することになった。



2. 研修を通じて感じたこと

(1) ドイツのスポーツクラブ

150年近くの歴史があり、かつては競技スポーツが中心であったが、現在は多様なスポーツ文化が醸成されている。

- ①競技力向上を目的とした「競技能力の文化」
- ②健康志向からフィットネス系を取り入れた「健康の文化」
- ③余暇としてスポーツする楽しみを求める「享受の文化」
- ④冒険的でスリル感のある自己経験を求める文化

多様なスポーツ文化ができてきている背景には、ドイツのスポーツクラブが時代の流れ（個人主義、ライフスタイルの変化、少子高齢化等）を敏感に捉え、スポーツクラブのあり方を変化させているからである。現在の特徴としては、健康ブームや新しいスポーツの考案、美的志向（女性）、商業化クラブ等が挙げられる。

私は、社会環境の変化については日本でも同様であることから、日本のクラブにおいても時代の

流れを敏感に捉え、これからの少子高齢化社会に対応できる活動のあり方を模索する必要性を強く感じた。

(2) スポーツクラブ、学校、行政の連携

ドイツでは子どものスポーツ環境に対して、スポーツクラブ、学校、行政がそれぞれ連携し、少子化問題、全日制以降による放課後時間の縮減等の問題に対して前向きに改善するような話し合いができています。具体的には、クラブが学校体育に参入し指導に当たる取り組みがなされている。クラブ側からすれば新たな活動場所が増えるとともに、新規会員の獲得にもつながるメリットがあり、学校側からすれば専門的なスキルを有する指導者に指導を行ってもらえるというメリットがある。行政側は学校体育で指導を行っているクラブに対して補助を行う等の支援を行っている。

日本の場合、すべての地域で当てはまるわけではないが、学校、クラブ、行政との連携がドイツと比較すると弱いと感じられた。

3. ドイツのスポーツクラブを体感して

今回のドイツ研修においては、サッカーユース世代が中心に活動している TUS グレーヴェンブロイヒ、高齢者が中心に活動しているコルシェンブロイヒ・シニア世代スポーツクラブ、クラブ会員で音楽隊を結成しているオルケン体操クラブ等を視察させていただいたが、共通して感じたのはクラブの「家族的な雰囲気」や「クラブ関係者のクラブに対する愛着感」だった。すべてのクラブにおいて、理事、会員、スタッフの様子を見ることができたが、すべての人が笑顔で楽しそうに活動されていたことが特に印象に残っている。

クラブの活動内容が充実していることに加え、クラブが100年以上にわたり地域から愛され、クラブが次世代に受け継がれている様子を肌で感じることができたことはとても貴重な経験であり、ドイツに来なければ味わえない感覚だった。

私が体感した「家族的で愛着感のあるクラブ」というクラブ像は、日本のクラブが目指すべき姿

であると実感するとともに、クラブと地域、そしてクラブと行政との関わりがとても重要であるとも感じた。

4. おわりに

今回の研修で桑田団長をはじめ団員の皆さま、日本体育協会事務局の皆さま、ドイツでお世話になった通訳の多田様・松尾様のおかげで無事に充実した研修が送れましたことに対し、心より感謝申し上げます。

この研修を通じて、日本のクラブとドイツのクラブのそれぞれの良いところ、今後の課題がとてもよく分かった。今後は私自身、責任の重さを自覚し、日本のクラブの発展に少しでも貢献できるよう「100年続くクラブ」を目指し、努力していきたい。



岸田 昌章

げんき倶楽部はしもと
会長

1. はじめに

2013年4月より、和歌山県総合型地域スポーツクラブ連絡協議会の会長に就任した。これを機にスポーツクラブについての見聞をより広めたいと思い、スポーツクラブ先進国でもあるドイツへの研修に応募した。ドイツのスポーツクラブは100年以上の歴史を有しており、クラブ規模の大小を問わず多種多様なクラブが存在しており、クラブハウスでアフタースポーツ（スポーツした後）に団らんすることを楽しむこと等はすっかり日常的であると聞いていた。そんなスポーツ文化をぜひ見てみたいという希望と、また以前より旧東ドイツで発展したコーディネーショントレーニングにも大変興味があり、一層思いを駆り立てられた。成田を発ち、機中から見下ろしたユーラシア大陸の壮大さに胸が高鳴る。

2. 日独の時代背景

100年以上の歴史を有するスポーツクラブがあるドイツでは、連邦制度ゆえの国に対する対抗意識や移民文化との融合を図るために、地域住民が主体となってクラブが創設された。それぞれの地域性を重視しながら自主的に誕生したクラブに対して、地域住民は誇りを持って運営や指導に当たっている。

一方、日本の総合型クラブは育成が開始されて約20年程度であり、ドイツのクラブを手本にしながらも行政からの提案先導によるクラブづくりが多く、その意味でスポーツクラブ誕生の経緯が異なっている。



3. 日独で共通する問題

ドイツのクラブが抱えている問題点として、学校との連携、少子高齢化、ボランティア不足等がある。ドイツでは数年前より、学校の授業が午前中のみ（半日制）から夕方まで（全日制）に延長されるという変化があり、そのことによって小学生のクラブ会員の活動が減少するだけでなく、クラブへの学校施設の開放も思うようにいかないとのことである。また、少子高齢化によってクラブが提供するスポーツプログラムに変化が現れている。さらに、ボランティア不足についても、地域住民（特に若者層）のクラブ離れが起因している。これらは日本のクラブが抱える問題点と共通しているだけでなく、いずれの問題点も日本では最重要の問題である。

4. 未来への一歩

スポーツを楽しむためのクラブとして、長年発展を遂げてきたドイツのクラブだが、昨今はメタボリックシンドローム等の健康問題に対応するため、より健康志向の高いコースやプログラムを提供している。今後は、社会的な健康志向に対する

ニーズの向上に伴い、より質の高い運動指導やパーソナルトレーナーのように医療分野に詳しい運動指導、高齢者向けのコーディネーショントレーニング等がますます普及していくことが予想されている。

5. 終わりに

日本では、1964年東京オリンピック後に、スポーツ愛好家たちが集まり同世代による単一種目のスポーツクラブの活動が盛んになった。そしてこの度、二度目の東京オリンピックを迎えるにあたり、多種多様なスポーツニーズを包含するシステムである総合型クラブが活躍すべき時代がやってきたと言える。多種多様なスポーツニーズを包含するという意味で日本の一歩先を行くドイツのスポーツ文化は、アフタースポーツにクラブハウスでビールを飲むことができる環境にとどまらず、スポーツが地域住民の日常生活に溶け込んでいる環境であるということが分かった。

今後、日本のクラブにおいても、すべてのクラブがある一定の方向を目指すのではなく、よりスポーツプログラムやクラブマネジメントの質を高めた、いわばプロフェッショナルなクラブからボランティアを中心としたクラブ等様々なクラブの形態があって良いと思う。そして、1つひとつのクラブがそれぞれの地域の実情に応じた活動が行えていれば、ドイツのクラブのようにスポーツが地域住民の日常生活に溶け込んでいる社会の実現が目指せるのではないかと考えている。

日本では、スポーツに限らず様々な分野でいわばトップダウン型の取り組みがなされた。しかし、市井の人々がトップダウンの取り組みを自分達で見事に咀嚼しそれぞれの地域の実情に応じた独自のものとして練り上げてきた歴史を持つ。そんな日本人の逞しさに、地域スポーツクラブの未来を懸けたいと思う。

最後に、ドイツ研修に関わっていただいた多くの関係者の皆様に心から感謝したい。



久本 成美

NPO法人しいだコミュニティ倶楽部
理事長

1. 研修参加の動機

10年前ドイツのスポーツクラブを紹介するビデオで見た風景が頭の中から離れず、いつか地域スポーツクラブの先進国であるドイツを自分の目で見て肌で直接感じたいと思っていた。また、2005年に「NPO法人しいだコミュニティ倶楽部」を設立、運営する中で、ドイツのクラブ運営方法で自身のクラブに活用できる部分があるのではないか、特に、今後クラブとして力を入れようと考えている障がい者に対するスポーツプログラムについて参考になることがあるのではないかと考えたため、今回、ドイツ研修に応募することとした。

2. ドイツでは

10月27日に成田を出発し、ヘルシンキで乗り継ぎ、無事デュッセルドルフに到着した。空港では研修期間中お世話になったアクセル・ベッカー氏の出迎えを受けた。宿舎への移動はメルセデス・ベンツのバス。ベッカー氏から「研修期間中はぜひ積極的に質問して欲しい」と声をかけていただいた。普段控えめな私の心を見透かされているようであった。

ドイツの街並みはレンガ造りの建物、石畳の道、赤や黄色の落葉樹、大きな教会があり、テレビで見た風景と同じであった。研修会場であるライン・ノイス郡庁舎には毎日徒歩で向かいながらドイツの街の雰囲気味わった。

3. 講義を通じて感じたこと

研修期間中に行われた講義を通じて感じたことを以下に記載する。



(1) 全日制移行に伴うクラブの取り組み

近年、ドイツでは小学校が半日制（午前中に学校で授業を受け、午後は地域のクラブで活動する）から全日制（午前中から夕方まで学校の授業がある）へと移行している（ドイツでは教育制度を州が管轄しているため、全日制を採り入れない学校もある）。全日制の小学校が増加傾向にある要因として、核家族化や共働き夫婦の増加により、午後に子どもの面倒を見ることができない状況や、日本の学童保育システムのように、学校において午後の時間帯に地域のボランティア等が子どもたちの面倒を見るようになってきていることが挙げられる。全日制移行や少子化の影響を受け、子どものクラブ加入率が低下している。

ドイツと同様に日本においても少子化や核家族化という問題を抱えているが、日本の場合、その解決のための1つの手段として総合型クラブがあるように思われる一方、ドイツでは学校教育の充実という方向からの施策がとられている。日本とは全く逆の取り組みであると感じた。

(2) クラブを支えるドイツのスポーツシステム ドイツの場合、地域のスポーツクラブへ加入す

ると、市、郡、州のスポーツ連盟及びドイツオリンピックスポーツ連盟（DOSB）の会員として登録されると同時に、自分の参加するスポーツ種目の競技連盟へ登録される。主に市や郡のスポーツ連盟では、クラブの利益につながる支援策として、クラブマネージャーや指導者の研修等を行っている。州スポーツ連盟は、スポーツ施設の建設促進、スポーツ用具の調達、指導者等への報酬に対する助成等を行っている。

（3）健康志向に対応したクラブの取り組み

近年、クラブで提供されている活動種目の特徴としては健康志向のプログラムが多い。要因はドイツ国民の健康に対する意識が高まっていることが挙げられ、国民の健康志向の高まりによりクラブにとってはクラブ活動を発展させるチャンスであるということであった。特にドイツは心臓疾患による死因が多いため、クラブでは心臓疾患予防教室が開催されている。また、健康志向のプログラムを医者や保険会社等と連携のうえ提供し、それが州スポーツ連盟から認定されれば、保険会社から助成が受けられるというシステムがあった。

（4）行政とクラブの関係性

日本では金銭を払ってまでスポーツをすることへ抵抗感があると言われている。これはスポーツ振興が行政主導で行われ、スポーツ施設は無料または安価で使用できていたことが起因する。一方で、ドイツではスポーツによって得られる効果（地域づくり、健康づくり等）を高く評価し、行政からクラブに対し積極的に財政的支援を行っている。その意味で、フォルカー・リットナー教授が言われた「スポーツは市（行政）を必要とし、市（行政）もスポーツを必要としている」という言葉が印象的であった。

4. クラブ視察を通じて感じたこと

研修期間中に訪問したクラブについて感じたことを以下に記載する。

（1）コルシェンブロイヒ・シニア世代スポーツ

クラブ

クラブには立派なクラブハウスがあったが、もともと銀行であった建物を自己資金約2,000万円で購入して改築しているようだ。クラブでは50歳以上（最高93歳）を対象とした水泳教室を行っており、心臓に不安のある会員のため医師も同伴する等の配慮がなされている。また、スポーツ活動だけでなく、日帰りから長いものでは12日間の旅行会も行っている。

（2）オルケン体操クラブ

1896年に少人数の体操クラブとして設立され、大小2つの体育館を自主財源（会費）で建設していた。体育館は床を上下に可動させることができ、コンサート時の観客席等に利用できる仕組みになっている。スポーツ教室だけでなく、会員によるコンサートや交流パーティー等も行われており、まさに地域密着のクラブである。

訪問当時、体育館では3人制のバレーボールが行われていた。コート横で見学していたところ、「一緒にプレーしましょう」と身振り手振りで誘われたため、コートに入りクラブ会員と楽しい時間を過ごした。

5. 最後に

今回の研修で感じたことは、自分たちのクラブにおける将来ビジョンを考えて、プランを立て実行することのできる「組織づくり」と「人材育成」が必要であるということだ。今回の研修でテーマとして挙げていた障がい者に対するスポーツ環境の整備に関して言えば、高度な知識と技術を持った指導者やスタッフを育てておくことが重要であることを再認識した。

また、クラブ視察を通じて、クラブハウスには地域住民の「居場所」としての機能（クラブハウスに行けば誰かに会うことができ、スポーツで汗を流した後にビールを飲みながら語り合うことができるという役割）があり、地域コミュニティづくりに欠くことのできない施設であると痛感した。これまでは、漠然とクラブハウスがあれば良いと思う程度であったが、いつか我がクラブにも

クラブハウスを作りたいと強く思うようになった。

今回の研修全体を通じてアクセル・ベッカー氏には大変お世話になった。また、出発前から帰国まできめ細かくスケジュールを設定していただいた日本体育協会事務局の皆さま、桑田団長をはじめとする団員の皆さま、現地通訳の多田氏・松尾氏のおかげでドイツ滞在中安心して実りある研修ができた。心から感謝申し上げたい。



齋藤 陽子

NPO 法人クラブおおづ
クラブマネジャー

1. 私と総合型クラブ

私は、熊本県の阿蘇山と熊本城のほぼ中間に位置する大津町で生まれ育った。熊本の空の玄関口である阿蘇くまもと空港に向かって着陸態勢に入る飛行機からは、私の愛する大津町がとてもよく見わたせる。

私は4人兄妹唯一の女の子でありながら、一番男らしくたくましく育ったと両親は思っている。そんな私は、小学生になると同時に兄の影響で大津町体育協会が主催する水泳教室に通い始めた。そこから私の水泳人生が始まり、今ではそこで培った経験こそが私の宝物であると感じている。様々な人生の節目が訪れる度に、育ててくれた故郷や恩師への感謝の気持ちを何かしらの行動で示したいと思っており、その「想い」が私と総合型クラブを引き合わせてくれたように思えてならない。

2. 「クラブ」と「地域」と「コミュニティ」

現在の所属クラブである「クラブおおづ」が平成15(2003)年に設立された当初、私は指導者としてクラブに携わっていたが、平成23(2011)年からクラブマネジャーとして活動することになった。クラブマネジャーとして活動する中で、自分の住んでいる地域が様々な課題を抱えていることが分かり、私はいつしかそれらの課題解決の糸口がスポーツを通じたコミュニティである「総合型地域スポーツクラブ(以下、総合型クラブ)」にあるのではないかと考えるようになった。

そこで、クラブを支えるメンバーたちとクラブや地域の具体的な将来像について検討し、その将



来像を実現していくための「ビジョン」を打ち出すことが必要であると考えた。そのビジョンの策定にあたり、「総合型クラブ」が地域において果たすことのできる可能性を追求するため、総合型クラブの先進国であるドイツのクラブを実際に見て、感じて、そこから改めて自分のクラブを見つめ直したいと思った。それが今回のドイツ研修に参加した動機である。

3. ドイツでの研修

日本を出発してから約13時間。私たちを乗せた飛行機はドイツのデュッセルドルフ国際空港に着陸した。長旅の疲れや時差を感じることもさへ忘れ、これから始まる研修にワクワクしながら、空港で出迎えてくれたベッカー氏、通訳の多田氏・松尾氏と挨拶を交わした。私たちをホテルまで運んでくれるバスには大きくメルセデス・ベンツのマークが付いており、「本当にドイツに来たのだ!」と私に感じさせた。ドイツ到着日(27日)は、ホテル近くのレストランで骨付き豚肉(アイスバイン)、ソーセージを堪能した。それから毎日骨付き豚肉を食べることになるとは、私だけでなく団員の誰もが思ってもみななかっただろう。

翌日（28日）より、タイトなスケジュールで講義とクラブ視察が始まった。研修を通じて感じたことは、100年を超える歴史を持つドイツのクラブにおいても、時代の変化に伴い、学校教育制度の変化、少子高齢化や障がい者スポーツへの対応、ボランティアの減少等の複雑な課題を抱えているということだ。クラブが複雑な課題を抱えているという点については、日本と同様であると感じた。

また、クラブやスポーツに対する日本とドイツの「違い」についても感じる事ができた。

(1) 「自立」の捉え方の違い

クラブが抱える課題解決に向けた取り組みとしては、クラブの「自立（独立）」が挙げられるが、日本とドイツでは「自立（独立）」の捉え方が違っていた。私たち（日本）のクラブが目指している「自立」とは、クラブが行政からの補助金・助成金等に頼らない「経済的な自立」のことを指しているが、ドイツでは、自分たちの意思で物事を決定することが「自立」であるとされ、自分たちの意思決定がなされていれば行政から補助金・助成金等を獲得することも「自立」する手段の1つであると考えられていた。

(2) 「スポーツ」に対する捉え方の違い

日本ではスポーツに関する概念として、「競技スポーツ」「社会体育」「生涯スポーツ」「地域スポーツ」等様々な捉え方が存在する一方で、ドイツでは、「競技スポーツ」「生涯スポーツ」といった区分けがなく、時代の変化に応じてスポーツを柔軟に捉えている。ドイツでは、「人が自身の身体への関心を強くすることがスポーツへ関わる動機となる」という考え方のもと、スポーツへの関わり方は様々であっても、人生をより「楽しく」「豊かに」していくためにスポーツがあると考えられている。そのようなスポーツに親しむ場がクラブであり、スポーツを通じたクラブライフが確立されているように感じた。日本においても現代にふさわしいスポーツの捉え方が必要ではないかと感じた。

その他、多くの違いを感じる事ができたが、

その根本にはスポーツ振興が『『トップダウン』で進められてきた日本』と『『ボトムアップ』で進められてきたドイツ』という違いが大きいのではないかと感じた。

クラブ視察では、「TSU グローヴェンブロイヒ」「コルシェンブロイヒ・シニア世代スポーツクラブ」「オルケン体操クラブ」を訪問し、それぞれのクラブ運営や活動内容、課題等を学び、スポーツコミュニティとドイツビールの偉大な力により、言葉の壁は関係なくクラブを愛する仲間たちと心からの楽しい時間を過ごす事ができた。

こうして、多くの学びとお土産をスーツケースにパンパンに詰め、帰国日はあつという間にやってきた。

4. 総合型クラブの「未来」を描く

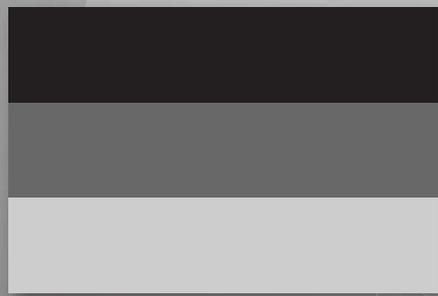
今回の有意義な研修を終えて、改めて自分が住んでいる地域や自分が所属するクラブを見つめ直すと、「本当にこの町が大好きだ」という思いと「クラブの未来には無限の可能性があるのでないか」という思いで私の頭の中はいっぱいになった。私が抱くすべての想いを言葉や形にしていくことはとても難しいことだと思われるが、多くの仲間と一緒に、1つひとつ夢を実現していきたい。少しずつ夢が実現していくことを想像するとワクワクしてくる。

今後は、クラブが地域において必要とされるような役割を果たしていけるように、今回のドイツ研修で得た学びと経験をしっかりと伝え、活かしていきたいと思う。この貴重な研修の機会を与えていただいたすべての皆様、桑田団長をはじめ派遣団の皆様に深く感謝申し上げたい。



IV

派遣事務報告



派遣事務報告

派遣団総務 安井 大樹

(公益財団法人日本体育協会地域スポーツ推進部クラブ育成課)

1. 派遣準備 (出発まで)

(1) 派遣団員の募集・決定

○4月22日(月)

- 都道府県体育(スポーツ)協会に対し、派遣団員の募集通知を送付する。

○5月31日(金)

- 派遣団員の募集を締め切り、20都道府県体育(スポーツ)協会より24名の推薦を受け付けた。

○6月17日(月)

- 選考委員会において、以下3点の選考基準にもとづき、派遣団員の選考を行った。

①日本体育協会公認クラブマネジメント資格(公認クラブマネージャーまたは公認アシスタントマネージャー)の保有者であること

②地域性(地域ブロックや都道府県)に偏りがなく(過去年度の派遣実績等も考慮した)

③所属クラブにおける活動状況や志望動機等

- 平成25年度第1回地域スポーツクラブ育成専門委員会において、13名の派遣団員を内定したほか、不測の事態に対応するため3名の補欠者を選出した。

また、派遣団団長として桑田健秀(SC全国ネットワーク幹事長/NPO法人地域総合スポーツ倶楽部ピボットフット理事長[東京都])、派遣団総務として安井大樹(地域スポーツ推進部クラブ育成課)をそれぞれ決定した。

○6月27日(木)

- 内定者13名、補欠者3名、非内定者8名、派遣団員の推薦があった20都道府県体育(ス

ポーツ)協会に対し、内定通知、補欠通知、非内定通知を送付した。

○7月11日(木)

- 渡航に係る航空券、宿舎等の手配業者について、見積り合せの結果、株式会社JTBコーポレートセールスに決定した。

○8月29日(木)

- 内定者1名より辞退の申し出があったことに伴い、補欠者より1名を新たに派遣団員として内定するとともに、事前研修会の開催案内を送付した。

(2) 事前研修会の開催

○6月27日(木)

- 団長及び内定者に対し、事前研修会の開催案内を送付した。

○9月2日(月)～3日(火)

岸記念体育会館内の理事・監事室において事前研修会を開催した。まず、山本理人氏(本会地域スポーツクラブ育成専門委員会中央企画班員/北海道教育大学岩見沢校准教授)より「ドイツのスポーツ振興、スポーツクラブについて」をテーマに、ドイツのスポーツ組織、スポーツクラブの概要について講義いただき、次に平成24年度派遣団員である西村貴之氏(金沢大学大学教育開発・支援センター特任助教)より、平成24年度のドイツ研修での様子等を講義いただいた。

また、派遣日程、研修内容、派遣団の役割分担、渡航に係る諸準備等について確認を行った。

○9月6日(金)

- 事前研修会を修了した内定者13名及び推薦都道府県体育(スポーツ)協会に対して、派遣

団員決定通知を送付した。

(3) その他

○4月～10月

- 派遣に係る諸準備（土産品購入、派遣団メンバーリスト作成、通訳依頼、海外旅行保険加入手続き、旅行代理店との打合せ等）を行った。
- ドイツでの受け入れ先であるライン・ノイス郡スポーツ相談課との日程、研修内容等についての調整を行った。

2. 派遣期間（研修時）

○10月26日（土）

【内容】最終打合せ・結団式

【宿泊先】成田ビューホテル

派遣団員各自が17時までに成田ビューホテルに到着。ホテル内会議室において、日程、役割分担、土産品の仕分け等の最終確認を行い、引き続き結団式を行った。

その後、ホテル内レストランにおいて夕食を取り、派遣団員間の親睦を深めた。

○10月27日（日）

【内容】ドイツ・グレーヴェンブロイヒへ向けて出発（成田空港→ヘルシンキ・ヴァンター国際空港→デュッセルドルフ国際空港）

【宿泊先】ホテルゾンダーフェルト（グレーヴェンブロイヒ）

9時に成田ビューホテルを出発し、バスにて成田空港へ向かった。空港ではJTB職員の指示に従い搭乗手続きを行い、荷物計量、出国審査等を済ませ、12時発のフィンランド航空074便にて経由地であるヘルシンキ・ヴァンター国際空港へ向けて出発した。9時間以上のフライトの後15時20分（現地時間）にヘルシンキに到着した。空港では税関を経て、入国審査を受け16時30分発のフィンランド航空2707便にてデュッセルドルフ国際空港に向けて出発した。17時55分（現地時間）にデュッセルドルフに到着。空港では、

本研修の受け入れ担当であるアクセル・ベッカー氏（ライン・ノイス郡スポーツ相談課長）、通訳の多田茂氏・松尾喜文氏の出迎えを受けた。空港からはバスでグレーヴェンブロイヒ市に向かい、宿舎であるホテルゾンダーフェルトのチェックインを行った。その後、グレーヴェンブロイヒ市内の伝統的なドイツ料理店で夕食をとり、ベッカー氏から28日からの研修内容について説明を受けた。

○10月28日（月）

【内容】表敬訪問・講義①②・クラブ視察①

【宿泊先】ホテルゾンダーフェルト

本日から、講義とクラブ視察が開始される。講義会場は宿舎から徒歩で15分程度の距離にあるライン・ノイス郡庁舎である。

講義に先立ち表敬訪問として、ユルゲン・シュタインメッツ氏（ライン・ノイス郡副郡長）、トーマス・ラング氏（ライン・ノイス郡スポーツ連盟理事長）、相馬安行氏（在デュッセルドルフ日本総領事館首席領事）の3名からそれぞれ歓迎のご挨拶をいただき、派遣団からは桑田団長より記念品の贈呈を行った。最後に、全員での記念撮影を行った。

表敬訪問後に講義①が行われた。講義①では、フォルカー・リットナー氏（ケルン体育大学特任教授）より、「社会の発展とスポーツ」をテーマに、ドイツ社会におけるスポーツとスポーツクラブの役割について、社会学的な分析をもとに講義いただいた。

講義①の終了後、講師とともに郡庁舎近くのレストランにおいて昼食をとり、講義時間内にできなかった質問についての話し合いを行った。

昼食後、講義②では、アクセル・ベッカー氏（所属先・役職は前出）より「ライン・ノイス郡のスポーツ」をテーマに、ドイツのスポーツシステムの概要及びライン・ノイス郡のスポーツシステムやスポーツクラブの現状について、講義いただいた。続いて、クラブ視察①として、グレーヴェンブロイヒ市内にある「TUSグレーヴェンブロイヒ」を訪問した。クラブハウスでは、クラブの歴史について説明を受けた後に、クラブで活動している

サッカーのユースチームの紹介を受けた。その後、クラブの理事との夕食懇親会を行った。

○ 10月29日(火)

【内容】講義③④・クラブ視察②

【宿泊先】ホテルゾンダーフェルト

午前中に郡庁舎において講義③を行った。講義③では、アクセル・ヴェルツ氏(TSVバイヤードルマーゲン)より「FIT for JOB -企業に対するクラブのオファー」をテーマに、クラブが企業で働く従業員の健康面のサポートを行う取り組みについて講義いただいた。また、「現代社会において企業で働く人々が抱える健康面の問題」そして「企業で働く人々の健康面に対してクラブはどのように取り組むことができるのか」をテーマに、派遣団員間でグループディスカッションを行った。さらには、TSVバイヤードルマーゲンの活動で取り入れられている健康器具の試用等も行った。講義③の後、28日と同会場で講師とともに昼食をとり、講義時間内にできなかった質問についての話し合いを行った。

午後からはバスでコルシェンブロイヒ市へ向かい、市内の体育館において、講義④としてハンス・ペーター・バルター氏(コルシェンブロイヒ市スポーツ課長)より「市町村のスポーツ振興」をテーマに、コルシェンブロイヒ市が行っているスポーツ振興の取り組みや市内のスポーツクラブが抱える課題等について講義いただいた。

講義④の後、バスでクライネンブロイヒに向かい、クラブ視察②として「コルシェンブロイヒ・シニア世代スポーツクラブ」を訪問した。クラブハウスにおいて軽食をいただきながら、クラブの歴史や現在行っている活動内容等について説明を受け質疑応答を行った。その後、クラブハウスからほど近くのドイツボーリング(ケーゲル)場へ移動し、クラブ理事たちとケーゲルを楽しみながら夕食懇親会を行った。

○ 10月30日(水)

【内容】講義⑤⑥⑦・クラブ視察③

【宿泊先】ホテルゾンダーフェルト

午前中に郡庁舎において講義⑤及び講義⑥を

行った。講義⑤においては、ゲスタ・ミュラー氏(ノイス市スポーツ連盟事務局長)より「クラブマネジメント」をテーマに現在ドイツのスポーツクラブが抱えている問題点とクラブマネジメントの観点からそれら問題点にどのように対応するべきかについて講義いただいた。

講義⑥においては、ヴィンフリート・シュミット氏(TVヤン・カペレン体操クラブ会長)より「スポーツクラブの資金調達」をテーマに、TVヤン・カペレン体操クラブの財政計画やクラブ財源確保に向けた取り組み、政治家や行政に対するロビー活動等について講義いただいた。講義⑥の後に、29日と同会場で講師とともに昼食をとり、講義時間内にできなかった質問についての話し合いを行った。

午後からは講義⑦として、トーマス・ラング氏(所属先・役職は前出)より、「ライン・ノイス郡スポーツ連盟」-スポーツクラブの利益を代表課題、目標、活動-をテーマに、ライン・ノイス郡が行うスポーツクラブに対する支援内容について、また、ラング氏が代表を務めるクラブの取り組み等について講義を受けた。

講義⑦の後、クラブ視察③としてグレーヴェンブロイヒ市内にある「オルケン体操クラブ」を訪問した。クラブ視察では、クラブが保有する体育館やグラウンド等の視察を行うとともに、クラブが結成している音楽隊による演奏を鑑賞した。派遣団では、演奏に対するお返しとして「東京音頭」を踊り、「上を向いて歩こう」を歌った。その後、クラブ理事らと夕食懇親会を行った。

○ 10月31日(木)

【内容】ケルン市内見学・ケルン体育大学視察・FCケルンスタジアム視察

【宿泊先】ホテルゾンダーフェルト

9時に宿舎を出発し、バスでケルン市へ向かった。ケルン市へ向かう途中にドイツの鉱山地帯等の見学を行い、その後ケルン市内見学として2時間半程度の自由行動を行った。

ケルン市内で昼食を取った後に、バスでケルン体育大学へ移動し、大学職員及びベッカー氏から大学の施設について説明を受けた。その後、ケル

ン体育大学からほど近くにある FC ケルンのサッカースタジアム（ラインエネルギーシュタジオン）の施設見学を行った。スタジアム職員の案内のもと、日常では入ることができない選手のロッカールームやプレスルーム等を視察することができた。

スタジアムの施設見学後は、バスでグレーヴェンブロイヒ市に戻り、宿舎近くのスペイン料理店で夕食をとった。

○ 11 月 1 日（金）

【内容】 講義⑧⑨・最終講義・答礼夕食会

【宿泊先】 ホテルニッコーデュッセルドルフ

（デュッセルドルフ）

午前中に郡庁舎において講義⑧及び講義⑨を行った。講義⑧においては、アクセル・ベッカー氏より「スポーツクラブの健康志向コース」をテーマに、現在、ドイツ国内で人気が高まっている健康志向のスポーツプログラムをスポーツクラブが提供できるように、ライン・ノイス郡で行われている指導者養成の取り組み等について講義いただいた。

また、講義⑨においては、ギーゼラ・フーク氏（学校スポーツ委員会事務局長）より、「スポーツクラブと学校の連携」をテーマに、学校制度改革によって変化する学校とクラブの関係性や、学校に対して積極的に働きかけているクラブの取り組み等について講義いただいた。講義⑨の後、30日と同会場で講師とともに昼食をとり、講義時間内にできなかった質問についての話し合いを行った。

午後からは最終講義として、これまで行ってきた講義及びクラブ視察を通じて派遣団員が感じたことについて、アクセル・ベッカー氏及びヴィンフリート・シュミット氏と質疑応答を行った。また、派遣団員間でグループディスカッションを行い、日本とドイツのスポーツクラブの相違点や今後の各団員自身のクラブ運営においてどのように取り組むべきかについて議論を深めた。最後にベッカー氏とシュミット氏より本研修全体の総括をいただいた。

最終講義の後、バスでノイス市へ向かい、市内

の中華料理店において日本団主催の答礼夕食会を開催した。答礼夕食会では、トーマス・ラング氏をはじめ4名の講師と通訳の多田氏・松尾氏にも出席いただき、日本派遣団から本研修に対するお礼を申し上げるとともに、花束等を贈呈した。最後にベッカー氏から本研修の修了証を各団員に手渡していただいた。

答礼夕食会終了後、講師の方々、通訳の多田氏と別れバスでデュッセルドルフへ向かい、ホテルニッコーデュッセルドルフに到着し、通訳の松尾氏と別れた。

○ 11 月 2 日（土）

【内容】 日本・成田へ向けて出発（デュッセルドルフ国際空港→ヘルシンキ・ヴァンター国際空港→成田空港）

帰国に向けて、9時にホテルを出発しデュッセルドルフ国際空港へ向かった。空港内ではJTB現地スタッフの指示に従い搭乗手続きを済ませ、11時45分発のフィンランド航空2704便にて経由地であるヘルシンキ・ヴァンター国際空港へ向けて出発した。15時10分（現地時間）にヘルシンキに到着し、出国審査を行った。そして、17時20分発のフィンランド航空073便にて成田空港に向けて出発した。

○ 11 月 3 日（日）

【内容】 成田空港到着・解散

10時05分（日本時間）に成田に到着、過密日程ではあったが、期間中大きな事故等もなく派遣団全員が無事に帰国することができた。

最後に、到着ゲートにおいて桑田団長より挨拶をいただき、解散した。

「とどけよう スポーツの力を東北へ！」
平成 25 年度公益財団法人日本体育協会
クラブマネジメント指導者海外研修事業 実施要項

1. 趣 旨：

生涯スポーツ社会の実現に向け、生活圏域における日常的なスポーツ活動の拠点となる総合型地域スポーツクラブを育成していく上で、地域スポーツクラブ先進国における地域スポーツクラブ発展の意義や歴史、クラブ運営のノウハウ、クラブ育成システム等を検証し、我が国における今後の地域スポーツクラブの発展・充実に資するものとする。また、既に設立された総合型地域スポーツクラブにおいて活動するクラブマネージャー等の資質向上と活動促進を図ることを目的とする。

2. 派遣者：公益財団法人日本体育協会

3. 派遣人員：15名（団長1名、総務1名、団員13名）

4. 派遣期日：平成25年10月27日（日）～11月3日（日・祝）（6泊8日）
* 10月26日（土）前泊

5. 派遣先：ドイツ連邦共和国 ノルトライン・ヴェストファーレン州

6. 研修内容：（1）ドイツの生涯スポーツ振興施策
（2）ドイツの地域スポーツクラブの現況と課題
（3）ドイツの地域スポーツクラブマネジメント
（4）ドイツのクラブマネージャー養成システム

7. 経費：派遣団員は個人負担金として20万円を日本体育協会へ納入する。
派遣に係る下記の経費は、日本体育協会が定めるところにより負担する。
（1）旅費（集合、離散に関わる国内交通費、前泊に伴う宿泊費）
（2）渡航費（但し、パスポートの取得に関する諸経費は自己負担）
（3）旅行傷害保険
（4）ドイツ滞在中の基本的経費（宿泊費、移動バス代等）
（5）研修に関わる諸経費（通訳・講師謝金等）

8. 派遣資格：平成25年4月1日現在20歳以上で、下記のいずれかの条件を満たす者
○本会公認クラブマネージャーまたは公認アシスタントマネージャー資格取得者で、現に総合型地域スポーツクラブにおいて、運営に携わっている者
○日本体育協会が上記条件を満たすことと同等であると特別に認められた者
*なお、団長、総務については本会が別途、人選するものとする。

9. 推薦方法：所定の推薦方式により、都道府県体育・スポーツ協会を通じて、平成25年5月31日（金）までに本会宛提出する。

10. 派遣団員の決定：

応募締切後、本会において審査の上派遣団員を内定し、本人および当該都道府県体育・スポーツ協会へ通知する。その後開催する事前研修会への参加を経て、派遣団員として決定し、本人および当該都道府県体育・スポーツ協会へ通知する。

11. 公認スポーツ指導者資格更新のための研修：

この事業への参加は、公益財団法人日本体育協会公認スポーツ指導者の資格更新のための義務研修となる。ただし、水泳、サッカー、スキー（コーチのみ）、テニス、バドミントン、剣道、山岳、空手道、バウンドテニス、エアロビック（コーチのみ）、スクーバ・ダイビング、スポーツドクター、アスレティックトレーナー、スポーツ栄養士、プロゴルフ、プロテニス、職業スキーの資格者については、別に定められた条件を満たさなければ資格を更新できません。テニスの指導者は、2ポイントの実績になる。

PHOTO SNAP

🇯🇵 10/26-10/27 🇩🇪



結団式



ドイツ料理

🇯🇵 10/28 🇩🇪



記念品贈呈



講義風景



ライン・ノイス郡庁舎



グレーヴェンブロイヒの街並み



ライン・ノイス郡旧庁舎



昼食



10/28



グレーヴェンブロイヒの街並み



グレーヴェンブロイヒにて



10/29



ディスカッション風景



ディスカッション風景



発表



講義風景



ケーゲル



デザート

🇯🇵 10/30 🇩🇪



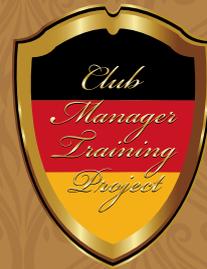
オルケン体操クラブ 拳法クラブの様子



オルケン体操クラブの音楽隊



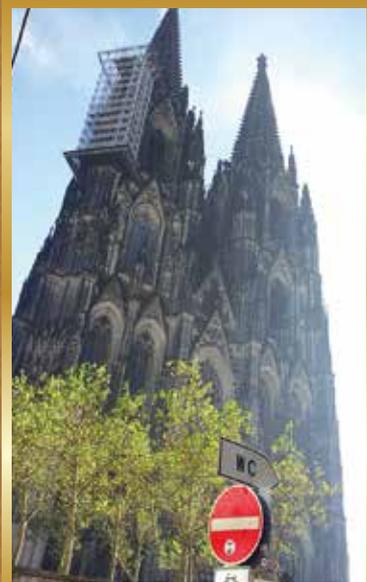
オルケン体操クラブの皆さん



🇯🇵 10/31 🇩🇪



FC ケルンスタジアム



ケルン大聖堂



FC ケルンスタジアムでの集合写真



FC ケルンスタジアムのプレスルーム

🇯🇵 11/1 🇩🇪



お世話になった通訳の多田さん・松尾さんにお礼の花束贈呈



修了証の授与



修了証の授与



昼食

🇯🇵 11/2 - 11/3 🇩🇪



成田空港 到着ロビーにて集合写真

宣言しよう、フェアプレイ。

宣言しよう。
全力をつくし、挑戦し、
楽しむことを。

宣言しよう。
仲間を信じ、思いやることを。

宣言しよう。
約束を守り、応援してくれる人への
感謝を忘れないことを。

その誓いは、スポーツを
もっと楽しいものにしてくれる。
日々の生活を
もっとすがすがしいものにしてくれる。

そして多くの人々を活気づけ、
今の日本を元気にするチカラにも
なってくれる。

さあ、あなたも手を胸に。
フェアプレイの誓いを。

フェアプレイで
日本を元気に

あくしゅ、あいさつ、ありがとう



「フェアプレイで日本を元気に」キャンペーンで、
フェアプレイの輪を広げ、日本をもっと元気に!

あなたもはじめの一步を、まずはホームページで。

[フェアプレイ宣言](#)

[検索](#)



日本体育協会は、スポーツ立国の実現のため、国民体育大会をはじめとする各種スポーツ大会の実施やスポーツ指導者の育成等を行うとともに、スポーツの持つ価値や意義を広くアピールし、国民の生きる力の育成と活力ある社会の構築に貢献していきます。また、日本をもっと元気にしたい。その想いから、「フェアプレイ宣言」推進の取り組みも行っていきます。



公益財団法人

日本体育協会

asics

大塚製薬



三井住友海上
MS&AD INSURANCE GROUP

LAWSON

LOTTE

SUNTORY

わたしたちは、「フェアプレイで日本を元気に」キャンペーンを応援しています。